

第五章、『奥の細道』と『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』の比較

芭蕉の『奥の細道』とアッギューエの『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード（この旅人、記憶に残るだろう）』という題名で書かれた紀行文では、歴史の回顧や、人々の生活との触れ合いが、印象的な名文で記されている。

アッギューエは 1943 年から 1946 年まで軍属として活動し、国境の近くに住んでいた民衆のために働いた。本作は、各地の折衝に当たっていた時期に執筆したものである。

そのなかでアッギューエは、インドの東地方（アッサム州）から北西地方（現パキスタンにあるカイバル・パクトウンクワ州）を中心とした任務の中で訪れた地方の、忘れられていた過去の伝統や歴史などを再発見し、現代の人々に今の時代と過去の時代に思いを馳せさせようとした。本作品はインドの北方にある自然や人々や伝統、忘れられていた歴史などを、旅先で詠んだ詩と散文を織り交ぜて描いた紀行文である

『奥の細道』は松尾芭蕉が元禄二年（1689 年）3 月下旬、曾良を伴って江戸から出発した、日本の東北での旅を中心に書いたものである。この紀行では人々が忘れ去っていた、かつて繁栄していた歴史、伝統的な事物、人々と出会いなどを描いたりして、当代と過ぎ去った過去の時代を繋げた。そして、歌枕を訪れ、芸術性に富む俳句を詠んで江戸文学を代表する作品を作り上げた。

芭蕉の旅は歌枕の巡回を中心としたものであり、一方、アッギューエの旅は、軍属として各地の状況を調査するための旅であった。しかし両者の旅の目的はそれぞれ異なっているが、旅の心構えは一致している。その心は両作品の冒頭に描かれている。両者は困難な旅に出て、再び戻ってこられるかどうかも解らなかったが、旅は人生そのものであり、止まることは死のごとしという思いを持っていた。そして、両者は旅の途中出合った伝統、歴史、風景、人々などを題材にして詩も詠み、詩人の魂を表出させた。

本章では、両者の紀行文に描写された事物の中から、類似点や相違点として七つの観点、すなわち（一）過去の著名な歌人（二）著名な遺蹟や遺構（三）各地の風俗（名所、花など）（四）歌枕（五）詠んだ俳句・詩（六）人々との繋がり（俳人たち・その他の人々）（七）旅への想いに焦点を当てて比較し、論じていきたい。

第一節、過去の著名な歌人

アッギューエは旅の途中で様々なところを訪れた。それは歴史的な場所、文学的な功績のある人物と関わりのある場所、様々な美しい風景の場所などであるが、当節では、文学的な功績のある人物を取り上げるものとする。

旅の第一行程で、アッギューエはアーグラに辿り着いた。そして、この近くにある詩人のナジル・アカバルアバディ（1735 年～1830 年）の墓を参拝した。ナジルはファダル・オブ・ナザム（意訳：詩の父）とも呼ばれていた詩人であった。彼が詠んだ詩の数は 20 万にもものぼり、その中でよく知られている詩集には『バンジャラナマ、（旅人の紀行）』、

『アドミ・ナマ (人間の紀行)』などがある。祭事にまつわるものから日用品を謳ったものまで様々な題材の詩がある。生前は常に大勢の人に囲まれていたが、詩人ナジルの墓は寂れたものとなっていた。アッギューエはナジルの時代を回顧して、詩人の人気の移ろいややすさを嘆いて次のように表現している。

〈ヒンディー語〉

सुना है कि जब कवि ताजगंज से गधा हाँकते निकलते थे कि मदरसे जाकर लड़कों को पढ़ा आवें, तब रास्ते में इतनी जगह लोग उन्हें रोक-रोक कर उनसे दो-चार बन्द सुना के जाने का सफल आग्रह करते थे कि नज़ीर मियाँ को गोकुल्पुरे में अपने मदरसे पहुँचते-पहुँचते साँझ हो जाती थी, और वह लड़कों को छुट्टी दे कर फिर रुकते-चलते रात तक घर पहुँच जाते थे/

“अरे यायावर रहेगा याद” पेज 34

〈訳〉

聞くところによると、詩人はタージ・ガンジュから生徒たちを教えるのにマドラサ⁴³への通勤の途中で人々に呼び止められ、詩を詠むようにせがまれた。大勢の人に応えているものだから、ナジール・ミヤーンはマドラサに着く頃には日が暮れてしまう。そして、その日の授業は休みということになり、また帰る時も何人かに呼び止められたりして、家に着くのは夜になってしまう。 『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』、ページ 34

更に、ナジルの時代の民衆が詩に対する親しみの感情を持っていたことにアッギューエは非常に感動し、次の言葉でナジルの時代の様子と現代の様子を比較して語っている。

〈ヒンディー語〉

एक वह दिन था, जब कविता का स्वाभाविक उद्रेक राह चलते को खींचता है और फक्कड़ कवियों की बानी सीधे लोक-हृदय में पैठ जाती थी..... हमारी कविता बानी नहीं रही, लिखतम हो गयी है; हृदय से हृदय तक नहीं जाती वरन एक मस्तिष्क की शिक्षा-दीक्षा के संस्कारों की नली से होकर कागद पर ढाली जाती है जहां से एक दूसरा मस्तिष्क अपने संस्कारों की नली से उसे फिर खिंजता है।

अरे यायावर रहेगा याद पेज 35

〈訳〉

ナジルの時代の詩は、人々の興味を引き起こし、直接人々の感情に訴えていた。けれども、私のような現代の詩人の詩は直接感情に訴えるのではなく教養のための書物として読まれるばかりである。更に、前の時代のように心から心に伝わるのではなくて、頭から出た詩は教養のための書物という形になり、それから書物を通して人々は自分の教養として理解する。 『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』、ページ 35

上記の文章では、アッギューエは詩人のナジルの人気を語ると同時に、ナジルの詩が人々に受け入れられていたことを語っている。そしてナジル時代の詩の価値とアッギューエ時代の詩の価値が大きく変ってしまったことを実感しているのだった。ナジル時代の詩人の言葉は直接人々の心まで届いていたという。けれども、現代の詩は教養の書物として扱われ

⁴³ イスラム世界における学院

るばかりで、本来的な響きがなくなってしまう。人々も詩をただの書物だと認識し、社会の本質を抽出するような価値のある文章だとして受け入れる態度を失ってしまったようであると、アッギエーエは嘆いている。

その後、アッギエーエは、ナジルの墓所から同じ地域に流れているヤムナ川のほとりの方へ進んだ。そこには、盲目詩人であるスルダース（1478年～1581年）が住んでいたという記念の庵が建っていた。スルダースは庶民の詩人であって、数万以上の詩を詠んだのであった。スルダースが詠んだ詩の一部は『スルサーガル、旋律の海』という長詩集として集成されている。アッギエーエは盲目詩人のスルダースの庵を訪問し、旅を先に続けた。

さらにアッギエーエの旅は、第二行程の初めの北インドのカシミール州に到達した。ここには中世期のムガル時代の女性詩人にして女王であるザエブン・ニシャ⁴⁴（1638年～1702年）のバリ・マハル（訳：妖精城）と呼ばれる城があった。かつては城内に小川の流れる美しい城であったが、現代では寂れてしまっている。アッギエーエはその没落した城を見て心を痛め、ザエブン・ニシャが詠んだ詩を次のように引用している。

〈ヒンディー語〉

हमदमे गर नेस्त ऐ दिल रोज़े-मेहनतागो मबाश यूनिसे ज़िन्दानिया रा बहतर अज़ दीवार नेस्त !
लाज्जते-दर्दे-मुहब्बत राज़िबेदरदां मयुर्स कदरे-सेहतरा नदानद हर कि औ बीमार नेस्त !
जादमे दरदैमो अज़ खूने जिगर परवरदा ऐम- कोह हा-ए-गम अगर आयद मरा आज़ार नेस्त!
“अरे यायावर रहेगा याद” पेज 84

〈訳〉

私に仲間がいなかったとしても、私の心は傷つかない。
檻の中の仲間はその壁以外に誰もいない。
愛の痛みの楽しさを痛みの分からない人に聞くことはなく
健康の価値が分からないような人には、病気がないのと同じように。
私達は痛みによって生まれ、
心から血がしたたるような苦しみの中で育てられたのだから。
山のような痛みが来たとしても、恐れることはないでしょう。

『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』、ページ 84

このように、ナジル、スルダース、ザエブン・ニシャらは生前の栄華にも関わらず、その死後には寂れた墓や荒れた城が残されているばかりである。こうした高名な学者や詩人が今では忘れられて、人気のない墓の下で眠っていることに、アッギエーエは深い感慨を覚えたのであった。

他方、『奥の細道』では、俳人である松尾芭蕉も詩人の跡を訪ね、さまざまな記録を残し

⁴⁴ ザエブン・ニシャはムガル帝国の第6皇帝であるアウラングゼーブの長女であり、マクフィ（訳：隠し）という詩号で詩を執筆していた。人生の最後は、幽閉されて過ごした。

ている。

芭蕉は東北の旅で飯塚に立ち寄った次の日、鏡摺や白石を通り、笠島に入った。芭蕉はここで藤原実方の塚を訪れることを思い立ち、『奥の細道』で次の文を記した。

<原文>「籐中將実方の塚はいづくのほどならん」と人にとへば、「これより遙か右に見ゆる山際の里を、養輪・笠島といい（中略）」と教ふ。

（「笠島」『奥の細道』角川文庫）

藤原実方は、平安時代中期の貴族・歌人であり、貴公子であった。藤原道綱⁴⁵や道信⁴⁶などとの親交や、清少納言など多くの女性たちとの交際が伝えられ、宮廷生活の交友歌や恋歌、贈答歌を数多く残している。藤原実方は『源氏物語』の主人公・光源氏のモデルであるという説もある⁴⁷。

長徳元年(995年)正月、実方は、一条天皇⁴⁸から陸奥守に命ぜられ、この地に赴任した。長徳四年(998年)一二月、実方が馬に乗って道祖神の前を通ろうとしたとき、地元の人が実方に馬から降りて通るように言ったが、実方はそれを無視して、道祖神の前を通った。すると馬が暴れて落馬し、それがもとで病気となり命を落としたという有名な故事でも知られている⁴⁹。

松尾芭蕉は、「奥の細道」の旅で疲れから実際に墓そのものを訪れることはできなかったが、笠島の藤原実方の塚に参ろうしたことで、先人である昔の歌人に対する尊敬の念を表したのである。実方は西行から深い共感を得た人物であった。芭蕉は西行に対する敬意を通じて、西行に連なる詩人としての実方を尊敬したのである。

文治二年(1186年)、陸奥に旅した西行は、実方の墓に立ち寄り、

「朽ちもせぬ その名ばかりを とどめ置き 枯れ野の薄 形見にぞ見る」⁵⁰

という和歌を一首残した。同じように芭蕉も西行に倣ってこの地を訪れた。笠島は、芭蕉にとって風雅の心が染みる憧れの地でもあったといえよう。

このように芭蕉の東北の旅は西行の足跡を辿ったものであり、『奥の細道』自体が西行の旅から影響を受けたものであることも知られている。

芭蕉は旅を進め、日光を通過した後、白河を渡河する前に殺生石を訪れた。西行法師を尊敬していた芭蕉は、『奥の細道』の旅の中で西行の足跡を訪ね、蘆野の柳に辿り着いたのである。

⁴⁵ 藤原道綱は平安時代中期の公卿又は議政官。母の藤原道綱母が蜻蛉日記を執筆。

⁴⁶ 藤原道信 972年 は平安時代中期の公家・歌人である。

⁴⁷ 小沢克己『奥の細道』新解説〈旅の事実〉と〈旅の真理〉東洋出版 2007年3月、ページ95

⁴⁸ 平安時代の第66天皇

⁴⁹ 小沢克己『奥の細道』新解説〈旅の事実〉と〈旅の真理〉東洋出版 2007年3月、ページ95

⁵⁰ 「笠島」『奥の細道』、角川文庫ページ25

西行は、平安末期から鎌倉初期、元永元年（1118）から文治六年（1190）に活躍した、武士出身の僧侶である。そして、西行は勅撰集でも良く知られているその時代を代表する歌人でもあった⁵¹。

芭蕉が殺生石を訪れた理由としては、下記の西行の歌に詠まれた柳があったためと推測されている。

道のべに清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ⁵²

芭蕉は、蘆野の領主から、西行由来の柳が現存していることを知り、柳を探しだして実際に見た。本章で次のように記述されている。

また、清水流るるの柳は、蘆野の里にありて、田の畔に残る。この所の郡守戸部某の「この柳見せばや」など、おりおりに、今日この柳にこそ立ち寄りはべりつれ。

田一枚植えて立ち去る柳かな （「笠島」『奥の細道』角川文庫）

上記の柳を見て、長年の念願が叶った芭蕉は、大いに感動したに違いない。西行の足跡に共感を抱き、感動を覚えていた芭蕉は、今まで目の前で田植に精を出していた人々が、苗の植えつけを終え立ち去っていたことに気が付いた。現実に戻ってきた芭蕉は、そこを離れたのである。

このように、芭蕉は西行に縁のある柳を見て、感動のあまり、現実の世界から西行が柳が見た時代に意識を移してしまった。芭蕉は西行と関連する柳を通して、西行に対する敬意を表した。

須賀川郊外の片隅に栗の大木があった。その木陰に、俗世間から離れ、隠者として暮らす僧侶がいた。栗の木とともに寝起きする僧を見た芭蕉は、西行の姿を想起した。僧の平安な趣から喚起した印象を、芭蕉は、比喻で表現している。芭蕉が僧と栗の組合せを、西行と同じように、山深い岩に滴る水辺で椀を拾うほどの境地に達しているように感じたのであろう。芭蕉は下記のように記している。

「栗といふ文字は西の木と書て、西方浄土に関係あり」

下記の句も詠んでいる。

世の人の見付けぬ花や軒の栗 （「須賀川」『奥の細道』角川文庫）

栗の花は慎ましい花である。栗の花を愛で、軒に咲かせる庵の主もまた、隠棲して、世人の目にとまらない人である。芭蕉は、西行の草庵の周りにあったとされる桜の花を偲んでいるのであろう。

『野ざらし紀行』の旅の際、芭蕉は、吉野の山奥に迷い込むなどしながら、西行の草庵跡

⁵¹ 『日本文学大辞典』第三巻、新潮社、1950年

⁵² 新版『奥の細道』、角川文庫、2003年、ページ20、注意から抜粋

を訪ねている。芭蕉は、西行の歌で名高い清水は、いまだ深山に同じように流れている⁵³と主張している。

続いて、芭蕉は東北の旅の途中、越前の境に吉崎の港から船に乗って渡り、汐越しの松を尋ねた。この松は西行によって歌に詠まれ歌枕となっていたので、芭蕉にとって尋ねるべきものとなり、ここでは西行の和歌をそのまま紀行文に記述している。

よもすがら嵐に波を運ばせて

月を垂れたる汐越しの松

(「汐越の松」『奥の細道』角川文庫)

なお、現代ではこの歌は西行によって書かれたのではなく、蓮如上人によって書かれたのだという説もあるが、当時の芭蕉はそのようには認識していなかった。

さらに芭蕉は象潟で西行が詠んだ桜を見物している。老木となっていた桜は、西行法師のかたみを当代まで残しているのだと、芭蕉は記している。

このように西行の足跡を追って訪ね歩いた芭蕉は、理想とする先人の見聞を追体験するために、先達の痕跡を巡り歩いていたのである。それは、柳、栗、松、桜といった自然物であり、また、古木である桜も含めて、本来はあまり人々の目を楽しませるものではなかった。にもかかわらず、芭蕉は西行の縁の地であるというだけで、それらの古木を訪ねたのである。このことから、芭蕉の西行に対する敬意を見て取ることが出来るのである。

他方、旅の端緒で芭蕉は歌枕の白川の関を越えたいと思い立ち、心が落ち着かなくなったことを記述している。そこで能因が詠んだ歌の「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白川の関」⁵⁴を思い起こしている。能因法師は芭蕉にとって、『奥の細道』での東北の旅で歌枕を訪れる重要な要素でもあった。

能因は平安中期、永延二年(988)から永承五年(1050)の僧侶、歌人である。彼は『後拾遺和歌集』を初めとする勅撰和歌集に多く入集し、「百人一首」にも採られており、中古三十六歌仙の一人としても知られている。

芭蕉は心が落ち着かない旅を毎日続けているうちに、白川の関に辿り着いた。風雅を志す人々の関心が向けられるこの関は、竹田大夫国行が越える前に着衣をわざわざ改めたり、能因の著名な歌の「秋風ぞ」の響きを想起するなど、古来から敬意が払われてきた場所であった。能因の詠んだ歌や縁のある場所などを語る芭蕉のこの旅は、古人に対する崇敬の気持ちを描写するだけでなく、古人に従うことで理想的な旅が出来るという芭蕉の考えも描かれているようである。

旅を進めて芭蕉は岩沼に着き、そこにある武隈の松の木を見た時には大いに喜んだ。昔から二木の松として歌に詠まれてきたこの松を見た芭蕉は、二度も都から訪れて歌を詠んでいる能因法師のことを思い出した。能因が二度目に来た時には松が既になくなっていたこ

⁵³ 『松尾芭蕉集』、小学館、1972年、ページ293

⁵⁴ (「発端」『奥の細道』角川文庫) ページ11

とが歌に詠まれ、人々の注目を集めたことから、松が植え直されたりもしていた。能因の歌に詠まれた松に対して、芭蕉は「今はた千歳の形ととのひて、めでたき松の気色になんははべりし⁵⁵」と『奥の細道』に記述し、将来の旅人に二木の松を訪れるように呼び掛けている。

古人の足跡を辿るこの旅で、芭蕉は山を越え、海辺を伝い、砂を踏み、十里あまりを渡って、象潟の村に着いた。それは潮風が砂を巻き上げ、雨が降りしきる暗い道のりだった。その道を歩いている芭蕉は能因の和歌「出羽の国にまかりて象潟といふ所にてよめる 世の中はかくてもへけり象潟の海士のとまやをわが宿にして⁵⁶」を想起していたのかもしれない。そして、その翌日、空が晴れて、華やかな朝、船で能因法師島に辿りつき、能因が三年間住んでいたという跡を訪れている。

このように、芭蕉の旅は能因の歌をきっかけとするものであった。芭蕉の旅は様々な過去の歌人の記憶と結び付いたが、能因もまた折に触れて、敬意と共に想起される存在であった。

<両作の関連>

俳人である松尾芭蕉と詩人であるアッギューエはそれぞれの国の著名な詩人の跡を訪ね、紀行文に記録している。アッギューエは詩人であるナジルの墓を始め、スルダースの庵や女王詩人のザエブン・ニシャの妖精城などを訪問して、詩人の立場から崇敬の気持ちを表し、彼らの文学的な貢献を現代の人々に伝えようとした。同じように芭蕉も白川の関、象潟、笠島などの地を訪れ、西行や能因の故事に倣い、紀行文を記述することで、人々に過去の歌枕として捉えられていた場所を、ふたたび活き活きと歌の精神が現れる神聖な場所として元禄期の人々に印象づけたのである。

更に、両作では著名な過去の文学者を描くことで、先人の生きていた時代の逸話を説明している。これは、過去の時代の文人を紀行文作品発表の時代に結びつけるという、極めて重要な役割を果たすものであった。

第二節、著名な遺蹟や遺構

アッギューエは、クラダ・バードにあるムガル帝国第六代皇帝アウラングゼーブ王（1681年～1707年）の墓を訪ねた。かつて栄華を誇った王族の、質素な墓碑を前にアッギューエは次のように語っている。

〈ヒンディー語〉

「औरंगाबाद-जैसाकी नाम से ही प्रकट है-औरंगजेबने बसाया था/ खुल्दाबाद भी उसी की कृति है/ खुल्दाबाद के अर्थ है 'स्वर्ग की बस्ती' / न जाने क्या सोच कर औरंगजेब उस स्थल को यह नाम दिया होगा, पर इतिहास ने उसे एक व्यंग- प्रतिहिंसा-जर्जर शरीरों को वहीं मिट्टी मिली - अपने ही रचे हुए स्वर्ग में सब मिट्टी हो गये/」
“अरे यायावर रहेगा याद” पेज 187

⁵⁵ (「武隈の松」『奥の細道』角川文庫)、ページ 28

⁵⁶ (「象潟」『奥の細道』角川文庫)、ページ 46

〈訳〉

「アウラングゼーブは自分の名前を冠して街の名前をアウランガーバードと呼び、人々が移住したところをクラダ・バードと呼んだ。クラダ・バードの意味は「天国の街」である。アウラングゼーブはなぜこの場所にこの名前を付けたのか分からないが、すべての栄華が歴史になり、彼が呼んだ天国の街はもう滅びて土になっている。」

『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』 ページ 187

アッギューエはアウラングゼーブ王の特徴を、信仰に篤く敬虔であり、王族でありながら自身も労働に従事していたことだと述べている。例えば、アウラングゼーブは王であっても帽子を作ったり、イスラム教の聖書のクルアーンを書いたりして、自分の生活を営んでいた。自分の墓もこの仕事で儲けた代金で作ったのである。このような質素な生活を送っていたにもかかわらず、ムガル帝国の王としては非常に長命で、50年間近く即位していた。この期間がムガル帝国の栄華の頂上であったとも言われる。

アッギューエはインドの歴史上、最大最強の帝国とその王の痕跡が、現代では話の上でしか残っていないことに対して深く思索を巡らせた。それは、そのような帝国も滅びるのだとしたら、何者が「永遠」を手に入れるのだろうかという、疑問の表出であると読み取ることができる。

一方、芭蕉も『奥の細道』で石巻の港で一夜泊まって東北の旅を続け、平泉に辿り着いた。奥州藤原氏の長い歴史を持つ栄華が既に滅びたことを思い出して落涙し、次の文と句で悔しい気持ちを表している。

<原文> 「三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡ハ一里こなたに有り。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。まづ高館に登れば、北上川、南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城を巡りて、高館の下に大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても、義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の叢となる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠うち敷きて、時の移るまで涙を落としはべりぬ。

春草や兵どもが夢の跡

(「平泉」『奥の細道』、角川文庫)

芭蕉の上記の言葉は大きく二つに分けられる。一つは、藤原氏の城の周りの細かい描写である。例えば、和泉の城を廻って大川に落ちる衣川や、南部にあって、南側からの敵の攻撃を防ぐ衣が関については詳しく描写されている。もう一つは、華々しく戦う義経や他の武士たちへの追憶である。高館に籠り勇猛に戦う武士たちであったため、この城が陥落することは不可能であると思われていた。しかし、杜甫が歌うように国は負け、今は自然の山河しか残っていないのである。

そうすると、藤原一族の栄華がどんなに素晴らしくても一時的な、ただ短い間のことでしかなく、今は跡しか残らないと、芭蕉は心重く語り、涙を流している。

平泉に着く前に、白河の関を通過した松尾芭蕉は、須賀川で、友人で俳人の等窮の家に、数日間、引き留められた。出立して後、阿武隈川の月の輪の渡しを越え、瀬の上という宿場

に辿り着いた芭蕉は、鯖野の丸山を訪ねた。そこには佐藤庄司⁵⁷の館の跡があった。本文では次のように述べられている。

<原文>是庄司が旧館なり。麓に大手の跡など、人の教ふるにまかせて涙を落とし、またかたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも、ふたりの嫁がしるし、まづあわれなり。女なれどもかひがひしき名の世に聞こえつものかなと、袂をぬらしぬ

(「伊塚の里」『奥の細道』角川文庫)

佐藤庄司の旧跡を訪れた芭蕉は、信夫郡・伊達郡の庄司であった佐藤元治の旧館の跡を見て回り、懐旧のあまり涙を流している。佐藤元治は平安時代末期の陸奥の豪族で佐藤継信・忠信兄弟の父であり、妻は藤原秀衝の娘であったともいわれている。文治5年(1189年)における奥州合戦の際、信夫庄において鎌倉の兵に抵抗し、捕えられた。芭蕉は、元治の子、継信・忠信の石碑を確かめ、それぞれの夫人のことを回想している。彼女達は、庄司の二人の息子を戦で失った父の心を慰め励ますため、息子兄弟の武将の姿を再現し、この場面で演じたのである。

そして、二人の嫁の石碑を墮涙⁵⁸の石碑がここにあると書き加えられ、華やかな戦勝の場面を提示するとともに、家族の悲しみと、若い嫁の頼りがいのある様子を思い起こし、芭蕉は大いに感動して涙を濡らし、歴史的な古人に対する自分の心境を表現したのである。

つづいて、松尾芭蕉は金沢を通して小松に到着し、多太神社に参詣した。ここで斎藤別当実盛⁵⁹の遺品である甲・錦などを拝観した。斎藤実盛は天永二年(1111年)生まれの平安時代末期の武将である。寿永二年(1183年)、加賀国での源義仲との戦、篠原の戦いで白髪の手を黒く染めて若々しく戦った。篠原の戦いにおける実盛の最期の様子は、『平家物語』巻七にも「実盛最期」として一章を成している。芭蕉は『奥の細道』で次のように述べている。

<原文>この所多太の神社に詣づ。実盛が甲・錦の切れあり。往昔源氏に属せしとき、義朝公より賜はらせたまふとかや。げにも平士のものにあらず。目庇より吹返しまで、菊唐草の彫りもの金をちりばめ、龍頭に鍬形打ったり。実盛討死の後、木曾義仲願状に添へて、この社にこめられはべるよし、樋口の次郎が使ひせしことども、まのあたり縁起に見えたり。

むざんやな甲の下のきりぎりす (「多太神社」『奥の細道』角川文庫)

松尾芭蕉は実盛の甲を見て、上記の俳句を詠んだのである。実盛の甲・錦などは、実盛が源氏に帰属した際、源義朝より送られたとされる品々である。甲には菊唐草の模様が彫刻されていた。実盛が討死した後、木曾義仲は樋口の次郎に甲と願状とを持たせ、神社に遺品を供えたのである。

かつて実盛は白髪を黒く彩色し、甲を被り勇戦した。芭蕉が訪れた時には、その甲の下で哀れみを誘うかのようにきりぎりすが鳴いている。芭蕉は実盛の甲に、いたく感動した。上

⁵⁷ 平安時代末期の武士で、藤原家の栄光のため戦った。

⁵⁸ 中国の晋の羊祜の没後、その碑を見る者は皆感泣したことから碑文を見たものは皆涙を流すといわれる碑

⁵⁹ 平安時代末期の武士である実盛は、73歳で白髪を染めて勇戦した。

記の句は、実盛に対する芭蕉の思いを示している。芭蕉は飾ってあった甲の下で鳴いているきりぎりすが、昔、戦で犠牲となった実盛を悼んでいるのであろう、と詠んだ。きりぎりすの姿は見えない。しかし鳴き声が情景を伝えている。『奥の細道』の中で芭蕉は、散文と俳句を書き記すことによって、実盛への崇敬を示したのである。

このように芭蕉は、過去の人物について述べている。

以前にも、芭蕉は、市川村多賀城にある壺の碑を見て、哀れみを覚えて、心を乱されたことがあった。壺の碑は『奥の細道』で次のように記述されている。

<原文>壺の石ぶみは、高サ六尺余、横三尺ばかりか。苔を穿ちて文字幽かなり。四維国界の数理をしるす。「この城、神亀元年、按察使鎮守符將軍大野朝臣東人之所里也。天平宝字六年、参議東海東山節度使同將軍惠美朝臣朝狩修道而。十二月朔日とあり。聖武皇帝の御時に当たれり。昔よりよみ置ける歌枕多く語り伝ふといへども、山崩れ、川流れて、道改まり、石は埋もれて土に隠れ、木は老いて若木に代はれば、時移り、代変じて、その跡たしかならぬ事のみを、ここに至りて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す。

(「壺の碑」『奥の細道』角川文庫)

そして、芭蕉は、長旅の苦労も忘れて、涙が溢れ出るばかりであったと記している。芭蕉は東北の旅で古人の遺跡を見るたびに涙を流し、意外なほどの同情と共感を見せる。

<両作の関連>

アッギエーエも芭蕉もそれぞれ、かつての華やかな栄華の滅びたことを回顧し、そのことを感傷的な言葉で示している。芭蕉は藤原一族、佐藤庄司、実盛、壺の碑に対して、アッギエーエはムガル帝国などの古人に対して、それぞれの国の歴史的な人物への崇敬の念を示して紹介がなされている。

なお、アッギエーエの場合は、ムガル帝国は自分の国土を遠く広げていても、それは長い歴史の中のただ一時の短い間のことであると考えた。他方、芭蕉は古人に対しての感情を涙で示し、当時の読者に連なる重要な歴史を伝えようとしていた。

第三節、各地の風俗（名所、花など）

アッギエーエは旅の途中で山に登り、その途中で青いケシの花が咲いているのを見つけた。残雪の中に咲く青いケシの花は古代から幸運の象徴として重宝されてきたのであるが、手折られる花自身はどう思うだろうか。アッギエーエはそうした想いを文章に残している。

<ヒンディー語>

चिट्टानों में भटकते हुए सहसा देखा, एक गुहा के भीतर जमी बर्फ के परे से झाँक कर नील पोस्त का फुल मुस्करा रहा है/ मैंने प्रसन्न हो कर कहा "अहोभाग्य! यह शुभ फुल मुझे दिखा/" और लपक कर उसे तोड़ लिया/

फुल ने सिर झुका कर, आह भरते हुए कहा, "ठीक है, जो मुझे पाता है उस का भाग्योदय होता है, किन्तु मैं जब पाया जाता हूँ तो मेरी मृत्यु हो जाती है/" "अरे यायावर रहेगा याद" पेज111

〈訳〉

「岩山を放浪している時、突然、雪が積もっている空洞の中から覗いている青いケシの花が、笑みを浮かべているのを見つけた。私は嬉しくなって「祝福だ」と言った。「この花は私の為に姿を見せたのだ。」そして、すぐ手を伸ばして摘んだ。花は頭を下げ、ため息をついて言った。「まあ、私を見つけた人にとっては幸運だが、私は死ぬことになる」

『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』、ページ111

上記の言葉でアッギューエは花を見つけた人の嬉しさと花であるケシの皮肉な心を対比的に描写しようとした。人々は珍しいものを見つけると幸運だと考える。けれども、その幸運が相手にとっても同じであるとは限らない。そして、命を費やして得られる幸運そのものは、相手にとっては少しも幸運ではないだろうと、疑問の文をアッギューエは示している。

また、アッギューエはペンジャブ州ジャランダル公園で野宿した際に目にした、カッシア瘻の花に強い印象を受けた。その野宿した公園は「アマラタシ（カッシア瘻の公園）」と呼ばれているほどのもので、その後もアッギューエはカッシア瘻の花をしばしば追憶している。

ソーピアまでの道のりでは、その近辺で有名な滝について記述している。その滝は40～50フィートほどの高さで、水底には白い岩が沈んでいた。流水はミルクのように見え、音楽的な音を響かせていた。アッギューエはその滝に心を惹かれて、再訪を誓っている。

一方、『奥の細道』ではどのようなものが取り上げられたか、本節では芭蕉が描写した自然についての描写についても言及する。自然のものとしてまず第一に取り扱われているのは花であり、主に、桜、ねぶの花、卯の花などの名前が思い出される。

『奥の細道』で、芭蕉は月山に登った。八里まで登った芭蕉は、太陽と月が通るような雲の中を行くうちに、息も苦しくなり、体は冷え切っていった。やっと頂上に着いたが、日が沈み月が現れる時間になったので、芭蕉はその夜は月山で過ごすことにした。翌朝山から下りる時に、岩に腰かけて休んでいると、三尺ばかりの小さい桜が半分ほど開いているのに気づいた。こんな高山で、しかも雪の下に埋もれても咲こうとしている桜には、健気さが感じられた。芭蕉はこの桜を次のように語っている。

<原文>

「岩に腰掛けてしばし休らふほど、三尺ばかりなる桜のつぼみ半ばに開けるあり。降り積む雪の下に埋もれて、春を忘れぬ遅桜の花の心わりなし。炎天の梅花ここにかおるがごとし。行尊僧正の歌ここに思い出でて、なほあはれもまさりておぼゆ。」

(「出羽三山」『奥の細道』角川文庫)

芭蕉にとって、雪に埋もれていても春を忘れなかった桜は月山の神秘の一つであり、健気さの象徴でもあった。

一方、月山の前にも、芭蕉は卯の花とねぶの花などにも関心を寄せていた。東北で重要な三つの関の一つ、白河の関を越える時、古人が衣服を整えたり、冠をかぶったりして通った

ことが芭蕉に思い出され、「卯の花の白妙に」と芭蕉は「白河の関」で執筆している。

更に、卯の花の白さは、白河の関を雪の折に越えているような雰囲気をもたらしたのである。この状況は、曾良の次の句に表現されている。

卯の花をかざしに関の晴着哉 曾良

白河の関で卯の花を思い出した芭蕉は、象潟でねぶの花を句に詠んでいる。その句は以下である。

象潟や雨に西施がねぶの花

芭蕉が象潟に来て、雨に煙る風景を眺めて見ると、その情景はねぶの花が雨に打たれたようであると感じ、俳句として詠んだのである。ここで取り上げたねぶの花は、美人が眠りの中で、眼が半分閉じられているような風情を示している⁶⁰。

他方、芭蕉は日光に着いた時に、山を二十余町を登ると、滝があった。百尺も高いところから滝は一気に流れ落ち、岩も重なり合っていた。裏側からの眺めも評判の滝だったので、「裏見の滝」と名付けられていた。本作品で語られている文は次のようである。

<原文>二十余町山を登って、滝あり。岩洞の頂より飛流して百尺、千岩の碧潭に身をひそめ入れて滝の裏より見れば、裏見の滝と申し伝へはべるなり。

(「日光」『奥の細道』角川文庫)

そして、次の句も詠まれている。

しばらくは滝にこもるや夏の初め。

上記の句と滝は夏籠りという仏教的な習慣を語ったものである。芭蕉は洞穴に入り、しばらくの間沈黙し、清浄な気持ちで時間を過ごしたのである。

<両作の関連>

アッギエーエと芭蕉はそれぞれの国にある自然の花木を紀行文で描写している。例えば、古来インドでケシの花は幸運の証として認められていたことをアッギエーエは現代の読者にも伝えようとし、伝統を発掘して記した。また、カッサア瘻の花を美しく描写することで、自然は人間に身近なものだという主張もしている。更に、アッギエーエは滝の訪問で滝の弾ける泡が森に響いて、音楽的に聞こえていたということを記述し、豊富な自然を描写しようとした。

アッギエーエは厳しい自然の中で咲くケシの花に健気さを見出したが、芭蕉もまた月山で見かけた桜の花について書いている。雪で覆われている中でも桜が咲いたことは、厳しい自然の中でも生き残る桜の見事さを示したものだとは芭蕉は考えた。

そして、アッギエーエが描写した美しいカッサア瘻は芭蕉が語った白河の関での卯の花のようであり、カッサア瘻の花の美しさは旅が終わった後もアッギエーエの記憶に残り、旅を振り返る度に思い出されたのであった。一方、卯の花も「白河の関」で芭蕉らは冠にし、それを晴れ着にして、関を越えたのである。そして、象潟のねぶの花では悲劇的な女性の美

⁶⁰ 『奥の細道』角川文庫、ページ126

を象徴しており、このように様々な表現で花を多面的に利用しているのである。

続いて、両者は高い滝を紀行文で語ることで、滝で作られた自然の美しい風景を伝えようとした。

第四節、歌枕

芭蕉の『奥の細道』は歌枕を中心に巡る旅であるが、アッギューエの紀行文では歌枕にあたる伝統的な詩的モチーフとなる旧跡を訪れることは、主要な目的とはされていない。けれども、インドにも歌や詩の題材となってきた旧跡や名所などは、勿論存在する。例えば、タージ・マハル、ガンジス川、王城や墓碑などの遺跡などは、インドの詩歌で取り上げられることが多い。したがってアッギューエがインドにおける歌枕のようなところを訪れる場合があるが、それは、芭蕉のような歌枕の旅とは異なったものである。対して江戸時代の俳聖・松尾芭蕉は、歌枕を巡り歩いて俳句を詠むことを目的とした『奥の細道』の旅で、蕉風俳諧を確立した。

本節では、芭蕉が歩いた歌枕をいくつか語って行きたい。

芭蕉は『奥の細道』の発端部で、歌枕の「白河の関」や「松島の月」に向かうことを思い立ち、旅の目標として語っている。更に、草加で「耳に触れていまだ目に見ぬ境」と記述したのは、昔から歌人たちが歌に詠み継いできた和歌の名所、いわゆる歌枕を指すものである。これらの描写は芭蕉が歌枕を訪れるための強い情感を示している。

・「室の八島」の章で描写された歌枕

芭蕉が『奥の細道』の旅で最初に訪れた歌枕は、「室の八島」である。現在、栃木市にある神社のことを指し、底本では「室の八島」がそのまま章の題名ともされている。

「室の八島」は煙にちなんだ歌を詠み慣わしてきた歌枕であり、藤原実方、源俊頼などの歌が有名である。藤原実方は「いかでかは思ひありとも知らずべき室の八島の煙ならでは」と、源俊頼は「煙かと室の八島を見しほどにやがても室の霞みぬるかな」と詠んでいる⁶¹。

一方、『奥の細道』では、歌枕である「室の八島」について、次のように語られている。

<原文>此神は木の花さくや姫の神と申て、富士一体なり。無戸室に入て焼給ふちかひのみ中に、火々出見のみこと生まれ給ひしより、室の八島と申。又煙を読習し侍もこの謂也。このしろと云魚ヲ禁ズ。縁起の旨、世に伝ふことも侍し。

(「室の八島」『奥の細道』角川文庫)

「室の八島」⁶²の解説によると、木の花咲耶姫は一夜の契りで懐妊した。天孫瓊瓊杵尊はこれを疑い、妊娠した子は我が子ではなく、国津神の子に違いあるまいと疑心を抱いた。そこで木の花咲耶姫は無戸室に入り、そこを自ら土で閉ざして、もし天津神の子であれば、無事に産まれるであろうといい、無戸室に自ら火をつけた。炎の中で木の花耶姫

⁶¹ 『奥の細道』角川文庫、ページ 350

⁶² 「室の八島」『奥の細道』角川文庫、ページ 14 の注意に基づき。

は、見事出産を果たし、自分自身が無罪であることを証明した。

つづいて、「このしろ」という魚の食用を禁じる習俗にあることにも言及し、歌枕の「煙」に幅を持たせている。これらのことから、この章は「煙」の背景に広がる神話の世界の存在を示唆した場であると考えられている。

これらの情報は芭蕉が曾良から教えられたものとして、本部内では記述されている。これは、芭蕉による曾良の知識を評価するための表現であり、芭蕉と曾良の師弟関係を作品内で表現しようとしたものと思われる。

・「日光」の章で描写された歌枕

芭蕉が次に訪れた歌枕は「黒髪山」である。『奥の細道』では「日光」という章で、「黒髪山」が出てくる。日光の男体山は、黒髪山とも呼ばれ、古歌に詠まれている歌枕である。源頼政の歌の「身の上にかからむことぞ遠からぬ黒髪山に降れる白雪⁶³」があるが、山の「黒」との対比で白い「雪」が想起されているのである。『奥の細道』でも同じく黒髪山の名に「白雪」が意識され、次の文章で同行者である曾良の句の紹介が残されている。

<原文>黒髪山は霞かかりて、雪いまだ白し。

剃り捨てて黒髪山に衣更

曾良

(「日光」『奥の細道』角川文庫)

この句は、衣更と積雪をなぞらえており、源頼政の歌を意識したものである。このことから曾良、ひいては、芭蕉の古人に対する関心が見て取れる。

曾良は、河合氏にして、惣五郎といへり。芭蕉の下葉に軒をならべて、予が薪水の労を助く。このたび松島・象潟の眺めともにせん事を悦び、かつは羈旅の難をいたはらんと、旅立つ暁、髪を剃りて、墨染にさまを変へ、惣五を改めて宗悟とす。よつて黒髪山の句あり。衣更の二字、力ありて聞こゆ。

(「日光」『奥の細道』角川文庫)

曾良のことを上記の文の「旅立つ暁、髪を剃りて」という言葉で表現することで、弟子の見せた行脚に対する強い決心を芭蕉は描写したのである。

・「白河の関」の章で描写された歌枕

つづいて、芭蕉は多くの古歌に詠まれてきた白河の関に到着した。『奥の細道』の「白河の関」の一章は、古歌に思いを巡らすことで成り立っている。芭蕉は「白河の関」について次のように描いている。

<原文>心もとなき日数重なるままに、白河の関にかかりて旅心定まりぬ。「いかで都へ」と便り求めしもことわりなり。中にもこの関は三関の一にして、風騒の人、心をとどむ。秋風を耳に残し、紅葉を佛にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲き添ひて、雪にも超ゆる心地ぞする。古人冠を正し衣装を改めしことなど、清輔の筆にもとどめ置かれしとぞ。

⁶³ 「歌枕解説索引」『奥の細道』角川文庫、ページ332

（「白河の関」『奥の細道』角川文庫）

上記のように古歌の数々を繰り返し味わうことで、芭蕉はまさに陸奥に入ったという思いを確信し、「旅心定まりぬ」、つまり旅のなかに浸りきった気分を実感しているのである。ここで、芭蕉はあえて歌を詠まなかったのは、能因や藤原清輔などの古人の歌を尊重したためであり、ここでもまた古人の対する敬意を見て取ることは出来る。また、古人の衣装に扮して関を越えたことも古人に対する意識の表れのである。

そして、古歌に詠まれた「秋風」や「紅葉」の描写を重ね合わせることにより、芭蕉の目に映った青葉の情景が古歌の世界との一致したことを表現したと思われる。それは、その風景自体を漫然と眺めるのと違って、深い「あわれ」を引き起こすものである。それによって、芭蕉は詩的感動を深め、自然を深く見る事が出来たし、彼独特の観点を描写することが出来たと言える。

・「浅香山・信夫の里」の章で描写された歌枕

芭蕉は白河の関を渡り、須賀川にある知人の等窮の家は何日か泊まった。須賀川では、古歌の詩情を反芻しながら、陸奥の風土に生きて働く農民たちの田植え歌に耳を傾けた。その素朴な歌声の中に、詩歌の起源につながるものがあることを発見した。そこに陸奥入りの喜びを感じて、庶民の早苗を採る手元に昔の風流さを見出す俳諧を作っている。

その後、旅を進めて、歌枕の浅香山・信夫の里を訪れる。浅香山は福島県の日和田町に位置している小丘のことを指す。そして、芭蕉はその近くにある信夫の里も訪れる。その時のことは次のように記述されている。

<原文>等窮が宅を出でて五里ばかり、檜皮の宿を離れて、浅香山あり。道より近し。このあたり沼多し。かつみ刈るころもやや近うなれば、「いづれの草を花がつみとはいふぞ」と、人々に尋ねはべれども、さらに知る人なし。沼を尋ね、人に問ひ、「かつみかつみ」と尋ね歩いて、日は山の端にかかりぬ。二本松より石に切れて、黒塚の岩屋一見し、福島に泊まる。

明くれば、しのぶもち摺の石を尋ねて、信夫の里に行く。遥か山陰の小里に、石半ば土に埋もれてあり。里の童べの来りて教へける、「昔はこの山の上にはべりしを、往来の人の麦草を荒してこの石を試みはべるを憎みて、この谷に突き落とせば、石の面下さまに伏したり」といふ。さもあるべきことにや。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺り （「浅香山・信夫の里」『奥の細道』角川文庫）

須賀川においては、田植え歌を歌う農民たちに、信夫の里においては童に関心を向けた芭蕉は彼らを謳った俳諧を詠んでいる。これが高名な古人だけではなく、当世の一般民に対しても視線を向けていることの表れのである。

・「武隈の松」の章で描写された歌枕

芭蕉は現宮城県岩沼市にある武隈の松を見に行く。二木に分かれている松は古歌に詠まれ、かつて能因が訪れた時には木が伐られて橋に使われたので、能因法師は「武隈の松はこ

のたび跡もなし千年を経てやわれは来つらむ⁶⁴」という歌を詠んだ。そのことをきっかけとして、二木の松は更に評判を得たという故事を芭蕉は思い出し、次の文で語っている。

<原文>岩沼宿。武隈の松にこそ目さむる心地はずれ。根は土際より二木に分かれて、昔の姿失はずと知らる。まづ能因法師思ひ出づ。往昔、陸奥守にて下りし人、この木を伐りて名取川の橋杭にせられたることなどあればにや、「松はこのたび跡もなし」とはよみたり。代々、あるは伐、あるいは植ゑ継ぎなどせしと聞くに、今はた千歳の形ととのひて、めでたき松の景色になんはべりし。

武隈の松みせ申せ遅桜

と、拳白といふ者の餞別したりければ、

桜より松は二木を三月越シ

(「武隈の松」『奥の細道』角川文庫)

上記に述べられた「代々、あるは伐、あるいは植ゑ継ぎ」、「昔の姿」、「千歳の形ととのひて」、「めでたき」などは、武隈の松が詠まれる際の和歌の世界における豊かな古歌の描写を思い起こした表現である。これは、芭蕉の武隈の松という歌枕に対しての意識であって、強い関心の表現であると思われる。更に、拳白の餞別の句も、桜よりも古歌に詠まれた松の姿はみごとである、ということであると読み取れる。

それに対して芭蕉の句は、能因法師の「千年を経てやわれは来つらむ」に対する「松」を詠ったものであり、歌枕の松そのものではなく、能因法師の歌に対する興味が見て取れる。これが、芭蕉が歌枕ではなく、歌人である過去の人間そのものの営為に関心を向けていた最も代表的な例の一つである。

・「末の松山・塩竈」の章で描写された歌枕

つづいて、芭蕉は現宮城県多賀城市にある歌枕の塩竈の明神、末の松山、沖の石、野田の玉川、浮島等を訪れている。底本では「末の松山・塩竈」という章になり、次のように執筆されている。

<原文>それより野田の玉川・沖の石を尋ぬ。末の松山は、寺を造て末松山といふ。松の間々皆墓原にて、はねを交はし枝を連ぬる契の末も、つひにはかくのごときと、悲しさもまさりて、塩竈の浦に入相の鐘を聞く。五月雨の空いささか晴れて、夕月夜幽かに、籬が島もほど近し。蟹の小舟漕ぎ連れて、肴分かつ声々に「つなでかなしも」とよみけん心も知られて、いとどあはれなり。その夜、目盲法師の、琵琶を鳴らして、奥浄瑠璃といふものを語る。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子うち上げて、枕近うかしましけれど、さすがに辺国の遺風忘れざるものから、殊勝におぼえらる。

早朝、塩竈の明神に詣づ。国守再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階九段に重なり、朝日朱の玉垣をかかやかす。かかる道の果て、塵土の境まで、神霊あらたにましますこそわが国の風俗なれと、いと貴けれ。神前に古き宝燈あり。鉄の扉の面に、「文治三年和泉三郎寄進」とあり。五百年來の佛、今日の前に浮かびて、そぞろに珍し。かれは勇義忠孝の士なり。佳名今に至りて、慕はずといふことなし。まことに「人よく道を勤め、

64 「歌枕解説索引」『奥の細道』角川文庫) ページ 343

義を守るべし。名もまたこれにし従ふ」といへり。日すでに午に近し。船を借りて松島に渡る。その間二里余、雄島の磯に着く。

（「末の松山・塩竈」『奥の細道』角川文庫）

末の松山から塩竈につれて、いくつかの歌枕を巡覧した芭蕉は、上記の文を伝統的な歌文の世界を踏まえた歌枕的な感情の上に執筆している。「はねを交はし枝を連ぬる契の末」は「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむと契った歌を念頭に置いたもの⁶⁵」の恋の歌枕であり、「夕月夜幽かに」という記述は塩竈の夜の叙述である。更に、芭蕉は「肴分かつ声々」という表現を述べることで、漁師たちの生活の貧しさを描写している。そして、塩釜神社の初頭に述べられた「宮柱ふとしく」は歌枕に対する意識を描写するものである。

また、ここで描写されている琵琶法師や漁師たちは社会的弱さと呼べる人々でありっそうした人々に対する芭蕉の関心を見ることが出来る。

・「松島」の章で描写された歌枕

末の松山や塩竈の歌枕を訪れた芭蕉は、松島に到着する。陸奥の歌枕を代表する松島を訪れることは、芭蕉は冒頭で「松島の月まづ心にかかりて⁶⁶」という文章を執筆して旅の目的の一つとして示しているし、松島の月は古歌によく詠まれている歌枕である。『奥の細道』では、松島は次のように語られている。

<原文>そもそも、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭・西湖を恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたたふ。島々の数を尽して、そばだつものは天を指さし、伏すものは波にはらばふ。あるは二重に重なり三重に畳みて、左に分かれ右に連なる。負へるあり抱けるあり、児孫愛すがごとし。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲おのづからためたるがごとし。その気色えう然として美人の顔を粧ふ。ちはやふる神の昔、大山つみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞を尽くさむ。

雄島が磯は地続きに海に成出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、座禅石などあり。はた松の木陰に世をいとふ人もまれまれ見えはべりて、落穂・松笠などうち煙りたる草の庵、閑かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづなつかしく立ち寄るほどに、月、海に映りて、昼の眺めまた改む。江上に帰りて宿を求むれば、窓を開き二階を作りて、風雲の中に旅寝するこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身を借れほととぎす 曾良

予は口を閉じて眠らんとしていねられず。旧庵を別る時、素堂、松島の詩あり。原安適、松が浦島の和歌を贈らる。袋を解きてこよひの友とす。かつ、杉風・濁子発句あり。

（「武隈の松」『奥の細道』角川文庫）

東北の旅で最大の山場として取り扱われた「松島」は、『奥の細道』成立にあたり、重要

⁶⁵ 「末の松山・塩竈」『奥の細道』角川文庫の注意から抜粋

⁶⁶ 「発端」『奥の細道』角川文庫

な役割を果たした。芭蕉は日本一の絶景である松島と雄島という二つの磯の歌枕を尋ね、さらに古人の足跡が残る土地に心が惹かれて足を運んだのである。例えば、雲居禅師の坐禅堂や道心者の庵を訪れ、待ち望んでいた松島の月の景観を目にしている。また、芭蕉は旧友の詩文などを読んで強烈な感動を受けたことなどを描写している。これもまた古人だけではなく、詩作を行う友人に対する関心の表れである。

・「平泉」の章で描写された歌枕

芭蕉が訪れた平泉は悲劇を表す歌枕である。藤原三代の栄華と義経の劇的な歴史に記憶を思い起こしている。『奥の細道』の本文では次のように語られている。

<原文>「三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡ハ一里こなたに有り。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。まづ高館に登れば、北上川、南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城を巡りて、高館の下に大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても、義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の叢となる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠うち敷きて、時の移るまで涙を落とすはべりぬ。

春草や兵どもが夢の跡

(「平泉」『奥の細道』、角川文庫)

上記の文で「田野になりて」、「金鶏山のみ形を残す」、などを示すことによって、芭蕉はこの土地に来た感慨を描いた。更に、芭蕉は「国破れて」と「山河あり」という記述により、時の流れに耐えられない人間の営みが崩壊していくのに対して、自然の風景が生き残ることを示し、自然と人間の大きな対比を描き出した。自然と歴史に振り回された藤原氏という人間の小ささを感じ取った芭蕉は、強い悲しみの感情を覚えたのである。

・「最上川」の章で描写された歌枕

福島県に源のある最上川は、山形県を北流して、酒田付近で日本海に注ぐ大河である。芭蕉は船で最上川を遡り、歌枕の地を踏んだ。最上川を渡る稲船が古歌で詠まれている⁶⁷。芭蕉は次のように語っている。

<原文>最上川乗らんと、大石田といふ所に日和を待つ。ここに古き俳諧の種落ちこぼれて、忘れぬ花の昔を慕ひ、芦角一声の心をやはらげ、この道にさぐり足して、新古二道に踏み迷ふといへども、道しるべする人しなればと、わりなき一巻を残しぬ。このたびの風流ここに至れり。

最上川は陸奥より出でて、山形を水上とす。暮点・隼などといふ恐ろしき難所あり。板敷山の北を流れて、果ては酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。これに稲積みたるをや、稲船といふならし。白糸の滝は青葉の隙々に落ちて、仙人堂、岸に臨みて立つ。水みなぎつて舟危ふし。

五月雨をあつめて早し最上川

(「最上川」『奥の細道』、角川文庫)

芭蕉は大石田で俳諧の師としても活躍し、俳諧を巻いた一巻の連句を残している。そして、最上川は、古歌では稲船に対しての「最上川のぼればくだる稲船のいなにはあらずこの月ば

⁶⁷ 「歌枕解説索引」『奥の細道』角川文庫、ページ 351

かり⁶⁸」が有名であり、芭蕉もその「稲船」を思い出して記述している。ここで、芭蕉が一巻の連句を完成させたことで、俳諧の師匠でありながら、その土地の風土や人々から教えられるものを形にすることが出来た。これは、芭蕉と人々の繋がりがはっきりと形となって見ることができる事例である。

・「象潟」の章で描写された歌枕

松島と並ぶ東北きつての歌枕である象潟は、今の秋田県にある潟であって、芭蕉の歌枕を巡る旅の中でも描かれている。象潟は能因法師の歌の「世の中はかくても経けり象潟の蟹のとまやをわが宿にして⁶⁹」で知られている。芭蕉はここで能因が隠栖した遺跡も尋ね、次のように語っている。

> <原文> 江山水陸の風光数を尽して、今象潟に方寸を責む。酒田の港より東北のかた、山を越え、磯を伝ひ、いさごを踏みて、その際十里、日影やや傾くころ、汐風真砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山隠る。闇中に摸作して「雨もまた奇なり」とせば、雨後の晴色またたのもしきと、蟹の苫屋に膝を入れて、雨の晴るるを待つ。その朝、天よく霽れて、朝日はなやかにさし出るほどに、象潟に舟を浮かぶ。まづ能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡を訪ひ、向かうの岸に舟を上がれば、「花の上漕ぐ」とよまれし桜の古い木、西行法師の記念を残す。江上に御陵あり、神功皇宮の御墓といふ。寺を干満珠寺といふ。この所に行幸ありしこといまだ聞ず。いかなる故あることにや。この寺の方丈に座して簾を捲けば、風景一眼の中に尽て、南に鳥海、天をささへ、その影映りて江にあり。西はむやむやの関、道を限り、東に堤を築きて、秋田に通ふ道遙かに、海北にかまへて、波うち入るる所を汐超といふ。江の縦横一里ばかり、倭松島に通ひて、また異なり。松島は笑ふがごとく、象潟は恨むがごとし。寂しさに悲しびを加へて、地勢魂を悩ますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴脛ぬれて海涼し	祭礼
象潟や料理何食ふ神祭り	曾良
蟹の家や戸板を敷て夕涼	低耳

岩上にみさごの巣を見る

波こえぬ契りありてやみさごの巣 曾良 (「象潟」『奥の細道』、角川文庫)

芭蕉の旅は酒田の港から東北の方へ続き、山を越え、磯を伝い、砂浜を踏んで、鳥海の山によろやく辿り着いたときには、雨で山が煙って見えた。これはちょうど古歌に読まれた様子の再現であり、その様を芭蕉は描こうとしている。更に、和歌の世界では、能因や藤原顕仲などのように、漁師の苫葺きの家に旅寝する漂泊の侘びしさが詠み継がれてきたが、芭蕉は、「蟹の苫屋に膝を入れて、雨の晴るるを待つ」といって、それら古歌の詩情を反芻しながらも、違う側面から象潟の風景を捉えようとした。芭蕉は「象潟や雨に西施がねぶの花」と詠んで、象潟の入り江の岸辺で雨に濡れて咲くねぶの花に、象潟の風土の情感を歴史上の

⁶⁸ 「歌枕解説索引」『奥の細道』角川文庫、ページ 351

⁶⁹ 「象潟」『奥の細道』角川文庫

人物を意識して描き出した。このことからやはり、芭蕉が歌枕を古人と結び付けて歌う傾向があることを示している。

・「種の浜」の章で描写された歌枕

敦賀市内の湾に臨む「種の浜」を芭蕉は東北の旅で最後の歌枕として訪れ、その旅に友人の等裁も同行した。西行も種の浜の小貝を古歌で詠んだ。「汐染むるますほの小貝拾ふとて色の浜とはいふにやあるらん⁷⁰」という歌である。芭蕉は本文で次のように語っている。

＜原文＞十六日、空霽れたれば、ますほの小貝拾はんと、種の浜に舟を走す。海上七里あり。天屋何某といふ者、破籠・小竹筒などこまやかにしたためさせ、僕あまた舟にとり乗せて、追ひ風、時の間に吹き着きぬ。浜はわづかなる海士の小家にて、侘しき法華寺あり。ここに茶を飲み、酒を暖めて、夕暮れの寂しさ、感に堪へたり。

寂しさや須磨に勝ちたる浜の秋

波の間や小貝にまじる萩の塵

その日のあらまし、等裁に筆をとらせて寺に残す。（「象潟」『奥の細道』、角川文庫）

芭蕉はこの旅を通して北国の風土を発見し、「波の間や小貝にまじる萩の塵」の句で、西行の歌に導かれて訪れた砂浜の上には、丸でその歌のように小貝がいっばいに散らばっていると描いた。敦賀での「種の浜」は、旅路の最後を飾る清らかな記念の一章であるともいえよう。この西行の足跡を辿る旅において、尊敬する西行にまつわる歌枕にことさら重きを置いた友人と訪れたということは、芭蕉の人間を重視する視点を示すものとして象徴的な意味を持っているといえる。

芭蕉は様々な歌枕を巡覧しているが、それらは風景の美に触発された伝統的な詩歌を中心とした歌枕と、その地に込められた自然と人生の悲劇が歌われた歴史的な事件に関係する歌枕とに大きく分類される。前者は松島、象潟の章などが当てはまり、後者は平泉、飯塚の里、塩竈などが当てはまるものである。

芭蕉とアッギューエ、両者のそれぞれが執筆した紀行文を分析すると、その最も大きな相違点は歌枕の有無である。芭蕉の東北の旅は歌枕を中心に行われ、古人の足跡を辿ることと古歌のように句を詠むことで理想的な旅を成り立たせようとするものである。それに対して、アッギューエの旅は、インドの歌枕にあたる重要な旧跡を訪れてもそれに影響を受けて代表作となるような詩歌を残すことはなく、むしろ見知らぬ地を踏むことで得られる一期一会の出会いや体験を求めた旅を進めていったのだといえよう。

＜両作の関連＞

両作品の大きな相違点の一つは歌枕である。芭蕉の東北の旅は歌枕を中心に行われたが、アッギューエはただの旅人として旅に出掛け、歌枕のような場所などを訪れても詩をあまり残さず、散文でもあまり語っていないようである。

一方、古人の足跡を訪れた芭蕉は、古歌と関連つけたことを作品に記述し、自分でも歌枕を題材に俳諧を作っている。

70 「歌枕解説索引」『奥の細道』角川文庫、ページ 335

第五節、両作に詠まれた歌

アッギューエはインドの文学界で高い評価を得た有能な詩人であり、当時の文学ジャンルで中心であった韻文と散文、両方に影響を残した人物である。アッギューエは長い詩、短い詩、チャンプ（ヴェーダに由来する散文と韻文により構成される詩）、ムックタク（詩の一つのジャンルであって、詩の節それぞれが独自のものごとを語ることや情感を表すことが出来る詩）などの様々な詩集を発表した。

アッギューエは6行程の旅を集成し、紀行文の『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』を成立させた。インド北東部の旅を中心に執筆された本作は、インドでは珍しい作品であり、インド国内で見たもの、感じたものなどが散文と韻文の形式で描写されている。詩人として評価されているアッギューエではあるが、この作品の構成においては詩よりも散文の文量の方が遥かに多い。また、本作に収録されている詩は17篇のみであり、その上、その多くは、サンスクリット語、ヒンディー語、ウルドゥー語、英語といった様々な言語の詩の引用である。結局のところ、厳密には詩とは言えないチャンプ形式の詩を除外すると、アッギューエ自身が詠んだ詩は5篇に過ぎない。

本作の詩はアッギューエの紀行文を理解するのに役に立つと思われる。序文に記録されている次の詩を見て行きたい。

〈ヒンディー語〉

पार्श्व गिरि का नम्र, चीड़ों में डगर चढ़ती उमंगों-सी बिछी पैरों में नदी, ज्याँ दर्द की रेखा/
विहग-शिशु मौन नीड़ों में/ मैंने आँख भर देखा/ दिया मन को दिलासा-पुनः आऊँगा/
भले ही बरस-दिन-अनगिन युगों के बाद! क्षितिज ने पलक-सी खोली तमक कर दामिनी
बोली: 'अरे यायावर, रहेगा याद!' "अरे यायावर रहेगा याद" पेज 7

〈訳〉

パルシャルワ山には優しい松が立っていて、坂は情熱的に上り、川は眼下に流れる。線のような川は痛みを感じているようだった。巢で待つ小鳥のように。（この光景を）私の目はよく見た。また来ると慰めた。たとえ、何年経ったとしても。地平線は目を開き、雷鳴は応えた。「旅人よ。覚えて置くぞ」 『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』、ページ7

アッギューエは上記の詩で自然と人間の結び付きを表現しようとしている。アッギューエは、自分の詩の中に理想的な自然の風景を作って、その中に自分を入り込ませ、自然との対話を記述した。詩人は自分で描いた自然に離れがたい気持ちを抱き、また戻って来ることを約束して、自然を慰めた。けれども、この忙しい状況から、この理想の自然の中に再び戻ってくることは難しいように思われた。その苦悩は詩の最後の行で自然からの疑念を露にした皮肉な質問という形をとって描かれている。

またアッギューエは自然の中でも、とりわけ松に対して関心を持っていた。本作品の3行程の旅で次のようにも語っている。

〈ヒンディー語〉

जोगेन्द्रनगर से कुछ पहले चीड़ के वृक्ष देख कर तबियत एकाएक फड़क उठी थी।पृथ्वी माता के आकाश की ओर उठे हुए अभयद हाथों के तले रहने का सौभाग्य जिसने पाया है, वही जानता है कि चीड़ वृक्षों को देखकर ही हृदय में कैसे अनिर्वर्चनीय रस का संचार हो जाता है.....

“अरे यायावर रहेगा याद” पेज 140 - 141

〈訳〉

ジョゲन्दール・ナガールに着く前に、松の木が見えて来ることで、心が動き始めた（脈動した）。大地から空の方に伸びる手のような松の周りで時間を過ごした人だけが、松の木を見て言葉で表せないような情熱を心から湧き上がらせる。

『アレ・ヤヤフル・ラヘガ・ヤード』、ページ 140～141

上記の文でアッギエーエの松に対しての特別な感情を持っていることが理解出来る。この詩でアッギエーエは彼独自の自然感を描写した。

つづいて、アッギエーエは冬の始まりにインドの西側の当時カイバル（現パキスタンにある）と呼ばれていた地方に旅を進めたくなくなった。冬のカイバルは厳しい寒さで、旅には適さないのだが、アッギエーエの心は熱烈に旅の魅力を求めているので、旅を進めることにした。その時、次の詩を執筆した。

〈ヒンディー語〉

विश्वमय हे परिवर्तन !
हमारा चिर-आश्वास
सृष्टि-शिराओं में संचारित करता जीवन;
भेदन करते अंधकार तुम जग का क्षण-क्षण,
भूप, अकिंचन,

तुम्हारी ही विधि पर विश्वास
हे अनंत हित्कम्प ! तुम्हारा अविरत स्पंदन
खोल जगत के शत-शत नक्षत्रों से लोचन,
सत्य तुम्हारी राज्य-यष्टि, सम्मुख नत त्रिभुवन
अटल शास्ति नित करते पालन

“अरे यायावर रहेगा याद” पेज 38

〈訳〉

世界中で起きている変化よ
我々はそれに慣れてるから大丈夫
全静脈から伝送する生命
常に、世界の闇を拓くもの
国王と貧民は

その法則だけを信頼している。
無限のものよ！その絶え間ない脈動
世界中のあらゆるものの目を開き
真実はあなたの国の旗印、それを守る者よ
永遠に変えることの出来ない法に従う

『アレ・ヤヤフル・ラヘガ・ヤード』、ページ 38

アッギエーエは上記の詩を通して世界中で起きている変化を描写しようとしている。季節の変化は、世界の変化に変わり、やがてアッギエーエは世界中に変化を起こしている法則に対して、自分の詩で敬意を表している。

変化を引き起こす力には王族も貧民も従わざるをえない。アッギエーエはその力への信頼を示し、真実の旗を持つその力があるからこそ、世界中の闇がなくなり、全ての人類が生き続けることができるのだと伝えようとした。

続いて、アッギエーエは旅の途中、アムリトサルという町を訪れた。かつてイギリス政府

に対するインドの独立運動に参加していた時には、アッギューエは偽名を使い、この町で身を潜めながら、銃を修理する工場を作ろうとしていた。けれども、旅をしている時点では、自分がかつての敵のイギリス政府の下で働いている。

そのことを考えつつアッギューエは、次の詩を詠んだ。

〈ヒンディー語〉

हमारे काम न अपने काम नहीं हम, जो हम ज्ञात; अरे निज छाया में उपनाम
छिपे है हम अपरूप; गवाने आये है अज्ञात गंवा कर पाते स्वीय-स्वरूप!
“अरे यायावर रहेगा याद”, पेज 40

〈訳〉

我々の行いは我々の行いではない。我々は、我々のことを知らない。
我々は影に名前を付けられているだけである。我々の中にはそれを信じさせるものがある。我々は、それを捨てることで。本当の自分を見つけていく。

『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』、ページ40

アッギューエの上記の詩は人生に対しての不満を描こうとしている。かつての敵は仲間になり、逆に仲間が敵になるという運命は、人間の操作できる範囲にはないだろうという意識が見られる。更に、人間はこの世でただ与えられた役割を果たすだけであり、自分自身で役割を選ぶ力はないという悩みを描写している。

クングワタンというところでは、小雨が降っていて、日も暮れる頃だったので、周りには奇妙な寂しさが広がっていた。アッギューエの宿の近くにある石は夕日で赤く染まっていた。いつも美しく見える松も黒い影になっていた。この情景はアッギューエの心をいかにも悩ませ、次の詩を詠んだ。

〈ヒンディー語〉

निशा के बाद उषा है, किन्तु देख बुझता रवि का आलोक
अकारण हो कर सहसा मौन ज्योति को देते विदा सशोक...
“अरे यायावर रहेगा याद” पेज 107

〈訳〉

夜の後には、日が昇るが 太陽を沈むのを見て
理由もなく突然黙り込み 光を悲しげに見送るのだ。

『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』、ページ107

詠んだ詩は、アッギューエの悩みを表している。明けない夜はないことは分かっているが、夜が近づいてくると寂しさが感じられるのだ。これは、夜が空虚さをもたらすためである。

それに対して、アッギューエは、「ニシャ、原：निशा、訳：夜」が悲哀を、「ウシャ、原：उषा、訳：日」が喜びを表すものだとして、自分を納得させている。ニシャの暗黒や闇の後には、ウシャの光や明るさに来ることは明白であるように、心にわき出る苦しみも波のようなもので、沈めば次には幸せの感情が浮かび上がってくるものだ、と述べている。

『奥の細道』は歌枕を巡ることを主な目的とした旅の俳諧紀行であり、旅で訪れた場所や出会った人々、そこで感じた寂しさ、悲しさ、嬉しさといった感情などが歌われている。

本節では、『奥の細道』における、芭蕉以外の俳人、歌人が詠んだ句を除き、東北の旅で芭蕉が詠んだ俳句だけを筆者の考察で論じて行きたい。

更に、芭蕉の句は基本的に三つの題材に区分できる。歴史、自然、芭蕉本人の感情である。

歴史は、著名な文学者や歴史上の人物、文学的モチーフを題材としたものである。伝統的な文学を再構成することで、それらをより洗練させるものとなっている。同時に芭蕉、あるいは当時の文学者の学識を読み取ることができる。

自然は、旅の中で目にした雄大な自然や季節の変化、様々な動植物といったものを題材としており、芭蕉の旅先で目にした事物のスケッチという意味合いが強い。そこに芭蕉自身の関心や興味などが盛り込まれることもある。

芭蕉本人の感情は、自身の所感を句の形にして書き残したもの、という形式であり、これもまた旅先で感じたことや感情の動きなどをスケッチしたものという意味合いが強い。

これらの分類に全ての句が厳密に当てはまるということはなく、複数の題材が組み合わさっていることも多い。しかし、句の主題は概ね、いずれかの分類に収めることは可能であり、以下の考察においては、とりわけその主題が明確に表現されているものを選択して論じることとした。

それでは、本題に入りたい。

● 歴史を描写する句

芭蕉の歴史に対する関心の中心は、著名な歌人と戦いに敗れた武人の最期に向けられている。そのため、歌人に対する敬意を作品で表す意思を読み取れる「笠嶋はいつこさ月のぬかり道」、平泉で詠まれた歌を中心とした武人の末路を悼む「夏草や兵どもが夢の跡」「五月雨の降り残してや光堂」「むざんやな甲の下のきりぎりす」、また類似したモチーフとして権力に振り回された美女を謡った「象潟や雨に西施がねぶの花」といった句に芭蕉の作家性を読み取ることができる。

それでは、例の句を個々に論じて行きたい。

・笠嶋はいつこさ月のぬかり道

芭蕉は鐙摺や白石の城を渡り、藤原実方の墓を探して、山のふもとの養輪と笠嶋という村にあることが分かった。けれども、五月雨で道が大変ぬかるんでしまったので、芭蕉は行くのを止めた。そこで、養輪・笠嶋の地名は養・笠と雨が関係し五月雨に関係していると記述し、次の句を詠んだ。

笠嶋はいつこさ月のぬかり道

芭蕉は笠嶋を訪れる前の夜に飯塚に泊まり、病気でかかってしまった。それにも関わらず旅を続け、笠嶋に辿り着いた。ここで古くから伝えられている藤原実方の塚を訪ねようとしたが、五月雨の降り続いてぬかるんだ道は歩けなかったため、上記の句を作った。

この句において、芭蕉の心情がもっとも強く表れている部分は「いつこさ」という問いか

けである。「笠島」は、実方の墓を表す表現であり、実方に対する感情を示しているといえる。

・桜より松は二木を三月越し

芭蕉は歌に良く詠まれた武隈の松の木を訪れ、大いに喜んでいる。二本の股に分かれているこの松は、古人にも詠まれ、芭蕉憧れの松であった。更に、門人の挙白も松を訪れることを勧める俳句を詠んだので、その返歌として芭蕉は次の句を作った。

桜より松は二木を三月越し

芭蕉は門人の句に対して上記の句で応えた。門人の俳句に詠まれた通りに、芭蕉は桜に導かれて、二木の松を見ることが出来た。そこで、芭蕉は、私を待っていたのは桜ではなく二木の松で、これを三月越しにようやく見ることが出来たと詠んだ。

ここで、芭蕉は桜を松と比較して松の執着を感じている。なぜなら、三月の時点では、すでに桜が散っており、芭蕉を待つ松の姿に感動したためである。それ以上に、この二木の松は能因ゆかりの松であるという事情が芭蕉により強い愛着を抱かせる要因となっているのである。この句は、そうした芭蕉の重層的な感情が表現されているのである。

・夏草や兵どもが夢の跡

『奥の細道』で描かれた平泉は、歴史的に重要な場所の一つであり、奥州藤原家の名誉は夢のように消えたしまった。藤原氏の城は、守りやすい土地で、守りも堅く、兵の意志も強かったが、結局は陥落してしまった。今は跡しか残らないと芭蕉は嘆き、涙を流しながら次の句を詠んでいる。

夏草や兵どもが夢の跡

上記の句は藤原氏の歴史を描写している。藤原一族の栄華も、勇猛な武士も、一時のもので、今となっては芭蕉の前に広がる夏草に埋もれるばかりである。このような強力な存在が、一時的なものに過ぎず、今では、夢のように滅んでしまったことは信じがたいものである。芭蕉もまたそうした現実には衝撃を受けている。

・五月雨の降のこしてや光堂

平泉に着いた芭蕉は清衡、基衡、秀衡三代の頭首たちの像がある経堂を訪れる。その経堂は、門は崩れ、柱は倒れ、財宝も失われてしまったが、四方の外側に建てられた塀で光堂は千年先も遺跡として残されると芭蕉は記述し、次の句を作った。

五月雨の降のこしてや光堂

毎年の五月雨によりあらゆるものは朽ちて崩れた。けれども、五月雨はこの光堂だけには降らなかっただろうか。さすがの光堂は五月雨を避け、昔のまま華やかに残されている。これは藤原一族が滅んだとしても、変らないものがあるということでもあり、また藤原一族の栄光が語り継がれることの象徴でもある。

・象潟や雨に西施がねぶの花

江山水陸の美しい風景を見てから訪れた象潟の美は、芭蕉の心を動かした。酒田の港から東北の方へ出て十里を歩き、夕方になってようやく象潟の村に着いたが、砂煙と雨で鳥海山が隠れていた。雨に降られながら暗い道を歩き、雨の晴れた後の美しい景色を期待して、芭蕉は次の句を作ったと思われる。

象潟や雨に西施がねぶの花

上記の句は芭蕉が象潟で雨に煙る風景を眺めて見えた、象潟の入り江の岸辺に咲くねぶの花に雨が打たれる様子を芭蕉は詠んだ。ここで、象潟の雨で咲くねぶの花は、中国の悲劇的な運命を辿った西施という美人の目が寂しきで、半分閉じられている様に見立てられている。

・むざんやな甲の下のきりぎりす

芭蕉は金沢を通して、小松に着いた。ここの多太神社を参拝し、斎藤別当実盛の遺品である甲・錦などを見た。これらは源氏に属したとき義朝公より賜ったという説がある。甲には菊が彫られていた。実盛が死んだ後、木曾義仲は樋口の次郎に甲と願状を持たせ、この神社に遺品を納めさせたのである。芭蕉は実盛の甲を見て下記の俳句を詠んだ。

むざんやな甲の下のきりぎりす

かつて実盛が白髪を染め、この甲をかぶって勇戦したが、今はその甲の下であわれを誘うようにきりぎりすの音が聞こえているということを詠んだ芭蕉は、実盛の甲に対する感動を表現している。芭蕉は展示してある甲の下で鳴いているきりぎりすが、昔、犠牲になった実盛を悼んでいるのだと考えている。きりぎりすの姿は見えない鳴き声とその情景に趣を与えている。

● 自然を描く句

自然を読んだ句は芭蕉の見聞きした情景を描写することが目的とされており、河や海、山、星空といった雄大な自然と、草花や動物といった素朴で繊細な自然とに分類を細かくすることはできる。とりわけ最上川や涼風を詠んだ句が複数見られるが、これらは自然のスケッチや感想のようなもので、その詩情は比較的素朴なものである。そうした中であって、「閑さや岩にしみ入蟬の声」は語り尽くされたところはあるものの、芭蕉の世界認識を読み取ることのできる句ではあるだろう。

それでは、立石寺に詠まれた句を語って行きたい。

・閑さや岩にしみ入蟬の声

芭蕉は人々の勧めで山形領の立石寺を訪れた。寺は古い松と檜で囲まれ、土や石に苔が覆っていて、物音があまり聞こえなかった。その優れた風景の静寂さで芭蕉の心が澄み、次の句を詠んだ。

閑さや岩にしみ入蟬の声

芭蕉が夕方に立石寺を訪れ、全山は物音が一つも聞こえず、静寂さの中でただ蟬の鳴き声

だけが岩にしみ透るように聞こえた。この俳句は『奥の細道』でよく知られている句であって、句に出る「閑さや」は端的な表現であり、また「しみ入る」は一節に深められていく静けさが感じられると読み取られる。また、この句は、僧としての芭蕉の姿が浮かび上がってくる句でもあり、立石寺を建立した慈覚大師に対する敬意の表現もあり、その「閑さや」が仏教の修行の比喻でもあるということでもある。

● 芭蕉本人の感情を表す句

旅先で出会った物事に対して、芭蕉がどのように感じたかを詠じた句であり、心情を発句の形で表現したものということになろう。「草の戸も住み替はる代ぞ雛の家」「行く春や鳥啼き魚の目は泪」「あやめ草足に結ん草鞋の緒」「今日よりや書付消さん笠の露」「蛤のふたみにわかれ行秋ぞ」などは芭蕉の人間関係をきっかけに引き起こされた感情の表現であり、論じる価値があるものである。

それでは、芭蕉の感情を表す句を次のように語って行きたい。

・草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

芭蕉は『奥の細道』の冒頭で、上記の句を家の柱に掛けた。芭蕉には妻も娘も持たなかったため、この草庵は雛の祭とは縁がなかったであろう。けれども次の住人が自分のような世捨て人とは異なり、雛祭りの時雛を飾った家にするだろうと芭蕉は考えていた。

松尾芭蕉が隅田川のほとりにある芭蕉庵を出た時に詠んだ上記の俳句は、彼にとって非常に重要な意味を持っている。命がけの創作の旅と江戸に残してきた家族の思い出と親戚を思う心情を取り合わせることにより、そのはざまで葛藤する芭蕉の苦悩を表現しているのである。時代を振り返ってみると、ここでは長男次郎兵衛と行く最後の旅の途中、妻の寿卓が芭蕉庵で息を引き取っていたともいわれる。

・行く春や鳥啼き魚の目は泪

芭蕉が旅に出る時、友人や知り合いが集まり、千住まで芭蕉を送った。そして、千住で芭蕉は彼らと別れた。その別れの心情はどのようなものであったか、芭蕉の言葉を読んでみよう。

「又いつかはとこころぼそし。むつまじきかざりは宵よりつどひて、舟に乗て送る。千住というところにて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそそぐ。」と次の俳句を詠んだ。

行く春や鳥啼き魚の目は泪

「旅立ち」『奥の細道』角川文庫

友人が芭蕉を千住まで送ってくれた後、彼の心は別れの気持ちと同時に行く春の寂しさに感動していた。春の行くことは鳥や魚も感じている。そして、鳥は悲しみ、魚の目にも涙が浮かぶと詠んだ。芭蕉はここで友人と離れ、二度と会うことは出来ないかもしれないと思い、寂しさを感じたのである。それは芭蕉と友人の関係が親密であったためである。

芭蕉が千住で友人たちと離れる時述べたのは「親しくしてきた門人・知人たちはここで離別するのである。別れを惜しむ泪を流すのである」という言葉で、それから上記のような俳句を詠んだ。この俳句は友人関係の表現でもある。出発の際、人々との別れの挨拶の最中、

芭蕉は人知れず涙をながす。この涙は心の中で友人を心配して流した芭蕉の涙なのである。

・あやめ草足に結ん草鞋の緒

芭蕉は名取川を渡って、仙台に到着し、画工加右衛門というものを訪れた。風流が分かる加右衛門は芭蕉が仙台に泊まった期間、現地の色々なところを案内したり、別れる時紺の染緒をつけた草鞋二足を餞したりした。贈り物として草鞋をもらった芭蕉は次の句を詠んだ。

あやめ草足に結ん草鞋の緒

上記の句に詠まれた草鞋は仙台の名産であり、草鞋の緒にあやめを結びつけて、旅中の健康を願うものでもある。更に芭蕉は加右衛門の風雅を認め、彼の贈物に応じて俳諧を作っている。これは二人の親しい関係の現われでもある。

・一家に遊女もねたり萩と月

旅を続けて芭蕉は市振に到着する。ここで家を借りて夜を過ごしている最中、隣の部屋から若い女の声と年寄りの男の声が交じって聞こえた。女性は新潟の遊女で、伊勢神宮の参拝に向かい、男は市振まで送ったのである。翌朝、その遊女は芭蕉に向かって、同行を依頼したが、芭蕉はその依頼を断り、次の句を詠んだ。

一家に遊女もねたり萩と月

同じ旅の宿に遊女と泊まり合わせたエピソードは虚構とも言われ、俳諧を分析していくと、上記の句は芭蕉と遊女の比較を描写するものである。空には月が照っているのに対して、萩は庭に咲くものとする。それはそのまま遊女と自分との象徴したものである。更に、月は唯一のものであり、それに対して萩は有り触れたものであるという対比も含まれている。そして、苦労を味わう旅人と、若い遊女との対照を、芭蕉は社会的な格差を批評的に描いているといえよう。

・今日よりや書付消さん笠の露

芭蕉と曾良は山中まで一緒に来たが、曾良は腹の病気で伊勢国長島の親戚を頼って伊勢に行った。そこで行く者の悲しみ、残る者の残念さの状況は雲間に迷うようであるという感情にふれて、芭蕉は下記の句を詠んだ。

今日よりや書付消さん笠の露

この句は、二人旅を示す書付が露で消されてしまう様を描いているが、無論、それだけを意味するものではない。その二人旅という言葉には、曾良との旅という意味が込められているのだ。

この旅で曾良の知識は芭蕉にとって極めて役立つものであった。「室の八島」でも神を説明したのは神道を学んだ曾良である。白河の関・松島・平泉・象潟・金沢を経て、山中で腹を病んだ曾良は芭蕉に別れて先行し、芭蕉は曾良と別れ独りとなった。曾良と離れた悲しみ、そして、独りきりになった心細さは、一人旅の寂しさをより深いものにした。芭蕉はこれまで「同行二人」で旅してきたのだが、今日から旅は一人で歩まなければならない

い。大聖寺でのたった一夜の離別を芭蕉は「一夜の隔て、千里に同じ⁷¹」との言葉で記し、心の悲しさを示している。

・終宵秋風聞やうらの山

芭蕉は山中にいたときに同行の曾良が腹を壊し、伊勢長島の親戚に助けを求めた。曾良は「先に師と別れて旅立って行くのだが、歩く途中死ぬかもしれない。もし死んだなら折から季節の萩の花の咲いている美しい野原になると思うのである⁷²」と俳句で述べている。

その後、芭蕉は大聖寺という城下町の近くの全昌寺という寺に一泊する。ここはまだ加賀の地である。曾良も前夜ここにいた。その場で、芭蕉は次の句を作っている。

終宵秋風聞やうらの山

芭蕉は曾良と別れて一人となった。一人で旅をするのは寂しく、「旅は道連れ」ということわざがこのときふと出てくる。昨夜はこの寺に泊まって一晩中裏山に吹く秋風を聞いていた。たった一夜隔てただけなのに千里も遠く離れたような気がした。秋風を聞きながら休んだ。

芭蕉は生涯のうちに何度も親しい人と離れ離れになっている。ここで芭蕉が使った表現は柔らかなタッチである。旧暦三月末に江戸を発って四ヶ月になる。その間、苦楽をともにしてきた弟子の曾良の病を知った時、思わず悲しみが込みあげた。しかし、感情を抑えた表情である。この旅がきっかけで曾良との師弟関係は深くなり、翌年（1693）の旅にも同行した。

・蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

松尾芭蕉は友人の等裁と共に種の浜に行き、寺では一日のことを等裁に書かせて、露通に帰ってきた。そして美濃国の大垣に着く。ここで伊勢から来た曾良と再会する。大垣では芭蕉の親しい人々が一日中訪ねてきた。芭蕉は彼らと会って、長旅からの無事と旅路の辛苦や疲れをも労われ、まさに生き返ったような気がした。このように何日間か過ごして、また伊勢の方に進もうとしたとき以下の句を詠んだ。

蛤のふたみに分かれ行く秋ぞ

離れがたい蛤のふたと身が別れるように、見送る人々と別れがたい感じがする。ここで人々と別れて、芭蕉は伊勢の方に行き、終わろうとしている晩秋が一層身にしみて感じられることである。

この俳句は芭蕉の親しい人や見送る人々から離れがたい気持ちを蛤のふたみを通して伝えようとしている。旅の出発のときは春だったが、今は秋も行こうとしている。それと同じく我々も、ふたみが浦の蛤ではないが蓋と身に別れて新たな出発するのだ、と芭蕉は自分の友人関係を詠んだのだ。

⁷¹ 「全昌寺」『奥の細道』角川文庫、ページ55

⁷² 『松尾芭蕉集』小学館、ページ380

<両作の関連>

『奥の細道』は俳諧を作る旅でもあったのに対して、『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』は散文を中心に韻文も掲載されている紀行文である。

アッギエーエは作品の中自然、情感、人生などを描写した。他方、芭蕉も訪れた地域の自然、人間、感情などを詠い表した。

第六節、両作に描写された人々との繋がり

『奥の細道』は芭蕉の人と人との触れ合いの旅でもあるが、アッギエーエの紀行文はそれとは違って、限られた人としてしか交流できなかった旅であった。その理由の主な要素は次のようである。

(i) この紀行文では、インドの独立運動で巻き込まれた地域も訪れたからである。

(ii) アッギエーエがイギリス軍に属したことで、一般人と交流することが出来なかったからである。

(iii) アッギエーエの個人生活も混乱していたので、芭蕉のように友人や生徒などを作ることが出来なかったからである。

三番目が一番重要である。詳細に見ると、アッギエーエの個人生活の混乱は、いくつかの要因に基づく。アッギエーエの最初の結婚生活はあまり長く続かず、再婚するも子供をもうけることはなかった。インドの独立運動に参加したことで約6年に及んだ軟禁生活は交友関係に悪影響を与え、独立運動に参加した友人達はアッギエーエがイギリス軍に属することで次々に離れていった。1946年の初め、アッギエーエは軍隊を辞めたが、その同年には父ヒーラーナンド・サーストリーも亡くなっている。このようにこの時期のアッギエーエの人生は孤独に満ちていた。

それでも、アッギエーエは旅の途中で現地の人々と交流を持つこともあった。その人々の特殊な風習や特徴を取り上げ、以下に論じていきたい。

アッギエーエの旅は6つの行程に分割することが出来るが、その行程で最も交流の多かった旅として取り上げられるのは、第六行程である。これは、インドの東側にあるアッサム州の奥まで旅した行程である。

この旅では、アッギエーエは小さい象に乗り、アッサム州のアウニヤティという村に出かけていった。村長はゴーサイという名前と呼ばれ、村を守る傍ら、宗教師の役割も果たしていた。アッギエーエが訪ねたゴーサイは300人以上の生徒を持ち、アッギエーエとサンスクリット語とヒンディー語を織り交ぜて会話した。話が終わると、アッギエーエに生徒たちへ世界の現状について講義するように依頼した。問答の形で始まった講義は2時間も続いた。その後、皆で伝統的な土器で食事をし、また馬のような小さな象に乗って帰った。

アッギエーエは村長であるゴーサイと交流し、自分の学者としての学識を示したのであった。それを感じ取ったからこそゴーサイは、アッギエーエに生徒たちに世界の現状を講義するように依頼したのである。ここで、アッギエーエの立場は、文学者であると同時に、様々

な知識を持つ学者であると認識されたのである。しかしながら紀行文では、アッギューエとゴーサイの生徒たちの間に行われた講義の内容などは記録されていない。

同じ行程で、アッギューエは他の村にも向かっている。その村は、ダクシナパットという名前で知られ、近代化はまだ迎えていなかった。10 マイルも離れた村へ向かうためにアッギューエは早朝に大きな象で出かけた。大きな象に乗ったアッギューエは、林や背の高い草原などを通していったが、突然、象は蛇を見かけ、暴走を始めた。大きな象を抑えることは難しく、象使いとアッギューエは30分近く苦勞した。

ダクシナパットに着いたアッギューエは、直接ゴーサイのところを訪れ、食事をしながら、色々な話をした。50人の生徒を持っているこのゴーサイは、外部の人間はこの地域の文化などにあまり興味を持たないことに悲観的になっていた。それを聞いたアッギューエは、自分が文化や風景などに興味があるからこの地域を巡っていると慰めた。アッギューエに感謝したゴーサイは帰りに土産も持たせた。

この二番目の村長は、自分の村と外部との文化的交流を求めていた人物であった。しかし、それに応じる者がいなかったことを残念に思っていた。けれども、アッギューエと出会った時、アッギューエは文化人だということが分かり、交流の望みを真剣に話し合ったのである。

更に、アッギューエはグラムラという村に出かけようとしていた時、彼を引き止める声があった。それを不思議に思ったアッギューエは理由を尋ねると、1942年にインド独立運動で村のゴーサイが拘束されたことがあるからと答えた。けれども、アッギューエはそのことにあまり気を払わずに村に出かけた。

アッギューエが村に着くと、村人はアッギューエを不審者として取り扱ったが、アッギューエの友好的な態度や性格は村人の態度を軟化させ、最終的に彼らは色々なことを話し合った。その話の中で、村が直面している問題などもアッギューエに伝え、アッギューエはそれを解決する約束をして帰った。

文化的な交流していたアッギューエは他人にグラムラ村に行くのを避けるように言われた。けれども、アッギューエはその村を訪れ、友好的な交流で村人にある外から孤立の感覚を無くすことが出来た。

上記の例は、アッギューエが旅の途中に文化や伝統を初め、幅広く交流を行う中で得られた出会いである。それにより、インドの東側の奥地に住んでいる人々の伝統や文化などの様子を読者にも伝えることで、失われていた地域同士の結び付きを回復した。

個人との出会いから異なる文化に触れる例も作品では描かれている。アッギューエは第六行程の旅は、ブラマプトラ川の辺から始まった。川の辺にある船に乗り、船員も熱心に川の流れに沿って船を漕ぎ始めた。そのとたん、向かい風が吹いてきて、船の動きを妨げた。船員は何もできず、愛想笑いを浮かべ、「बड़ दिक्कारी (問題ない)」と言った。アッギューエも船員に賛成の意を見せると彼は船に腰をかけてタバコを噛み始めた。アッギューエは

このことを次のように語っている。

〈ヒンディー語〉

समिया लोग खूब हँसते हैं/ बाधाओं पर और भी अधिक हँसते हैं/ इस लिए की वे बाधा को बाधा मानते ही नहीं क्योंकि वह तो केवल काम न करने की एक युक्ति है, और काम न करना पड़े तो क्यों न हंसा जाये!
“अरे यायावर रहेगा याद”पेज 194

〈訳〉

アッサム州の人は良く笑う。障害に直面した時はもっと笑う。なぜなら、障害を障害だと思わないからであるし、それは仕事をしなくても済む工夫だからである。もし、仕事をする必要がなければ、笑った方がいだろう。『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤド』 ページ 194

川の流れの途中、止まってしまった船は、船員にとって、休憩の時間であり、タバコを噛みながら、アッギエーエにあまり心配する必要はないという態度を見せた。この性格は、船員だけが持っていることではなく、アッサム州に住んでいる多くの人々に共通するものであった。これは、アッギエーエにとって、文化的衝撃であり、未知のものであった。インドの他の地域は、障害に直面した時非常に活発に動くのに対して東インド人の性格は独特だとアッギエーエは語っている。

一方、芭蕉の『奥の細道』は人々の関わりの紀行文であり、その中には、多くの人間の姿が描かれている。だが、その人々と松尾芭蕉との関わりは一様ではなく、その分類を以下の表にまとめた。登場した人物と松尾芭蕉との関係性は下記のようなカテゴリーに分類できる。

『奥の細道』で芭蕉が出会った人物表

人物注	登場人物
俳人・門人	曾良、等窮、清風、一笑、久米之助、北枝、等裁、露通、越人、浄法寺桃雪、桃翠
それ以外の人	仏五左衛門、かさね、加右衛門、目盲法師、若者、遊女

上記の表で「俳人・門人」としてあげたものは、松尾芭蕉と直接関わりがある俳人と門人であり、「それ以外の人」に示したものは様々な人物が含まれるが、その中には特殊な外見や職業という特徴を持っている人間もいる。

つぎに、これらの表の中の人物を『奥の細道』に沿って、論じていきたい。

「ア」(俳人・門人)

『奥の細道』では多くの人物が登場するが、ここで取り上げる人物は芭蕉と直接交流があった俳人・門人だけを対象とする。それは、この人物は『奥の細道』の前後に交流があって、

芭蕉との関係の親密度も比較を通じて掴むことができるからである。対象とする人物を以下に論じていくものとする。

● 旅立ちで登場した人物（友人—知人）

芭蕉は『奥の細道』の旅を江戸から開始し、船で千住に辿り着いた。友人たちも同じく深川から乗船し、千住で芭蕉が旅立つ姿を見送った。芭蕉は『奥の細道』で友人たちとの別れの場面を著している。角度を変えてみると、芭蕉は千住で友人たちとの別れの場面から『奥の細道』を書き始め、大垣での友人との再会の場面で作品を完結させている。

前述したように芭蕉は千住で友人たちと別れた。その際、彼の心に浮かんだ言葉について、『奥の細道』に書かれたくだけりを読んでみることにしよう。

<原文>またいつかはと心細し。むつまじき限りは宵よりつどひて、舟に乗りて送る。千住という所にて船を上がれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙をそそぐ。

行く春や鳥鳴き魚の目は泪

これを矢立の初めとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立ち並びて、後影の見ゆるまではと、見送るなるべし。

（「旅立」『奥の細道』角川文庫）

千住での送別の後、芭蕉は、親友たちと別れる心境を、去りゆく春を残念がる心情の比喩で表現している。春の過ぎて行くことは無心の鳥や魚も感じている。鳥が悲しく鳴いて、魚の目にも涙が浮かぶ、と芭蕉は詠んだ。芭蕉はここで、別れた親友といつ再会できるだろうかと思い、寂しさを意識した。芭蕉が千住で友達たちと離れる折に述べたのは、「千住といふ所にて船を上がれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙をそそぐ⁷³」ということである。出発の際、人々との別れの挨拶の最中、芭蕉は落涙する。この涙は目には見えない涙である。芭蕉の友人に対しての強い感情を示している箇所であるといえよう。

● 須賀川にて登場した人物（等窮、可伸—俳人）

芭蕉は白河の関を越えて須賀川の駅長⁷⁴である等窮を訪ねた。等窮は俳号であり、彼の本名は伊左衛門である。昔、江戸に住んでいて、芭蕉の友人でもあった。須賀川村は幕府に直接管理され、北陸でも繁栄した土地であった。当地には等窮をはじめとして多くの俳人がいた。芭蕉は夜になると旅の疲れも忘れて連句の会を開催した。『奥の細道』の本文によると、

<原文>須賀川の駅に等窮といふ者を尋ねて、四五日とどめらる。まづ「白河の関いかに越えつるにや」と問う「長途の苦しみ、身心疲れ、かつは風景に魂奪はれ、懐旧に腸を断ちて、はかばかしう思ひめぐらさず。

（「須賀川」『奥の細道』角川文庫）

白河の関は奥羽の関門として古来、歌にも多く詠まれているところである。そこで等窮が白河の関を越える際の句について尋ねた後、芭蕉は下記の句を詠んだ。

⁷³ 「旅立ち」『奥の細道』角川文庫

⁷⁴ 鎌倉時代以降発達した旅客を宿泊させるところ。

風流の初めや奥の田植歌

田植歌は芭蕉が出会った、北国の地の歌の発端であった。陸奥の名所・旧跡などを探ろうとする芭蕉にとって、陸奥の風流の第一歩は田植えの歌から始まった。これは芭蕉が、奥羽の田植唄に最初の風流を見出したものである。

芭蕉は須賀川で旧友の等窮宅に宿泊した。二人は江戸で知り合った旧知の間柄で、芭蕉のこの旅に当たって、その関係が更新され、須賀川にある多くの俳人が紹介されたのである。

また、須賀川で可伸という世捨ての僧とも相知った。『奥の細道』の本文によると、

<原文>この宿の傍らに、大きいなる栗の木陰を頼みて、世をいとふ僧あり。椽拾ふ太山もかくやと聞かぬに覚えられて、ものに書き付けはべる、その詞、栗といふ文字は、西の木と書きて、西方浄土に便りありと、行基菩薩の一生杖にも柱にもこの木を用いたまふとかや。

世の人の見付ぬ花や軒の栗

(「須賀川」『奥の細道』角川文庫)

栗の花は世の人にあまり目立たないものであるが、この花を愛し、軒に咲かせていたこの庵主人も、世を避け、人々に隠れ住んで、世の人の目にとまらない人であるという俳句を詠んだ。これは、人目につかない地味な栗の花を比喻として用いて、可伸という人物を表現した句であると考えられる。

曾良日記にも「二十四日昼過ヨリ可伸庵ニテ会有⁷⁵」と記入され、可伸庵で連句の会が開催されたことが分かる。

芭蕉は須賀川で可伸と出会って、栗の下に庵に住むこの人物は芭蕉にとって、西行のような世捨て人であり、句会に参加したことで、文芸を知る人だと紹介している。可伸は芭蕉にとって新しい仲間であり、蕉門の新人ということでもあった。

● 尾羽沢にて登場した人物（清風—俳人）

芭蕉は尿前の関を越境し、『奥の細道』の道中、最大の難所といわれる出羽越えをおこなった。その途中で、尾花沢で鈴木清風を訪問し、十日間留まった。

清風は談林派の伊藤信徳に師事し、清風と芭蕉は、同じ談林派の俳人を通じ知り合った。『奥の細道』の旅での清風訪問は、二人の交友関係をより深めるものとなった。芭蕉は『奥の細道』の中で清風について、次のように記している。

<原文>尾羽沢にて清風というものを尋ぬ、かれは富めるものなれども、心さしいやしからず。都にも折々かよひて、さすがに旅の情をもしりたれば、日比とどめて、長途のいたはり、さまぐにもてなし侍る。

涼しさをわが宿にしてねまるなり

(「尾羽沢」『奥の細道』角川文庫)

清風は、芭蕉を何日間か私宅に引き留め、熱心にもてなした。芭蕉は寛いだ気持ちになり、我が家にいるかのような「涼しさ」を感じた、と述べている。さらにこの句には、清風への感謝の念も含まれていると思われる。清風は芭蕉の滞在中、連句の会を催し、歌仙二巻を巻

⁷⁵ 「曾良随行日記」『奥の細道』角川文庫、ページ 265

いた。『奥の細道』に見える上記の句も、句会で詠んだ発句である。このように二人の交流には、単に文学に止まらず、人間と人間とのつながりが見られ、豊かな人間関係が築かれていたといえよう。

● 金沢にて登場した人物（一笑—俳人・蕉門）

元禄二年、卯の花山⁷⁶や俱利伽羅峠⁷⁷を超えて、芭蕉は7月15日に金沢に入った。自分の到着を一笑に知らせようとした芭蕉は、そこで初めて、既に一笑が亡くなっていた事実を知った。『奥の細道』の本文によると、次のように語られている。

<原文>卯の花山・俱利伽羅が谷を越えて、金沢は七月中の五日なり。ここに大阪より通う商人何処といふ者あり。それが旅宿をとみにす。一笑といふ者は、この道に好ける名のほのぼの聞こえて、世に知らせる人もはべりしに、去年の冬早世したりとて、その兄追善を催すに、

塚も動けわが泣く声は秋の風 (「金沢」『奥の細道』角川文庫)

金沢で示されたこの文章は、芭蕉と一笑との関係を考えるうえで重要な手がかりになる。蕉門に入門していた一笑に対する芭蕉の親愛は深く、芭蕉は追善の句会で上記の句を詠んで悲嘆の情を示している。

芭蕉は自分の泣き声を秋風となって塚を吹いて行くと表現した。この句は、秋風に無限の悲しみがこもっていて、芭蕉の深く悼む心が述べられていると解釈できる。これは芭蕉が、自分の門人に対しての気持ちをいかに深く持っていたかを明確に表している。

● 丸岡にて登場した人物（北枝—俳人・蕉門）

蕉門の重鎮であった北枝は、江戸前・中期の俳人であり、芭蕉が金沢に着いた時から同行したと考えられている。北枝が金沢近辺の地理に詳しい人物であり、山中で曾良と離れた時から、芭蕉を案内した弟子は北枝であった。『奥の細道』に記されている芭蕉の文を見ると、次のようになる。

<原文>丸岡天龍寺の長老、古き因あれば尋ぬ。又、金沢の北枝といふ者、かりそめに見送りて、この所まで慕い来る。所々の風景過ぐさず思ひ続けて、おりふしあはれなる作意など聞こゆ。今すでに別れに臨みて

物書きて扇引きさくなごりかな (「天龍寺」『奥の細道』角川文庫)

芭蕉は、金沢から同行していた北枝との別れを、季節の別れの比喩で示している。もう秋なので、夏の慣れた扇とも離れる時節になったと同じように、北枝ともいよいよ別れるという意味である。離別の形見に、扇に句を書きつけて二つに引き裂き、それぞれに分け合った。いずれ名が残るであろうという気持ちで上記の句を詠んだのであろう。

⁷⁶ 『万葉集』以来の歌枕

⁷⁷ 越中国と加賀国の国境にあり、寿永二年の藤原合戦の古戦場。

● 福井にて登場した人物（等裁—俳人・友人）

松尾芭蕉は天龍寺を出立し、そこから三里程の場所にある福井に到着した。ここには等裁という俳人がいた。等裁について『奥の細道』は次のように記している。

<原文>福井は三里ばかりなれば、夕飯したためて出づるに、黄昏の道たどどし。ここに等裁という古き隠士あり。いづれの年にや江戸に来たりて予を尋ぬ。遙か十年余りなり。いかに老いさらぼひてあるにや、はた死にけるにやと、人に尋ねはべれば、いまだ存命してそこそこと教ふ。市中ひそかに引き入りて、あやしの小家に夕顔・へちまの延へかかりて、鶏頭・は々木々に戸ぼそを隠す。さてはこの内にこそと、門をたたけば、侘びしげなる女の出でて、「いづくよりわたりたまふ道心の御坊にや。あるじはこのあたり何某といふ者のかたに行きぬ。もし用あらば尋ねたまへ」といふ。かれが妻なるべしと知らる。昔物語にこそかかる風情ははべれと、やがて尋ね会ひて、その家に二夜泊まれて、名月はつるがの港にと旅立つ。等裁もともに送らんと、裾をかしうからげて、道の枝折りと浮かれ立つ。
(「福井」『奥の細道』角川文庫)

等裁は以前、江戸に来た折に、芭蕉の家を訪問したことがあった。芭蕉は等裁を隠士と呼んでいる。等裁が中心から外れた閑静な場所に暮らしていたためであった。等裁は質素な家に住んでいた。芭蕉が等裁を訪ねたとき、等裁は不在で、代わりに侘しげな女が出て来た。等裁の妻であった。貧乏に耐え夫を支える妻を、芭蕉は、『源氏物語』⁷⁸の雰囲気の中に登場させている。等裁の落ちぶれた家屋に芭蕉は二日間、逗留した。枕がなかったので、近辺の神社にあった不要な材木を拾ってきて、枕の代用にしたとも伝えられている⁷⁹。物質的な貧困が、却って等裁夫婦の心を気高くしていたのであろう。芭蕉は古くからの知り合いと楽しく語り、満足したに相違ない。三日目、芭蕉は中秋⁸⁰の名月を敦賀の港で見物するため、等裁の家を出立した。等裁は着物の裾を洒落た格好にして、敦賀までの道案内役を自ら引き受けた。

結局、等裁は種の浜まで芭蕉に同行した。種の浜で芭蕉は次のように記している。

<原文>其の日のあらまし、等裁に筆をとらせて寺に残す。

(「福井」『奥の細道』角川文庫)

貧しき中にあっても客人を歓迎した等裁の心情が、芭蕉の心に深く響いたのである。『奥の細道』の文章の中でも、福井は、等裁との交友のみを記した条である。そうした条は他に見られず、芭蕉が重点を持って等裁との関係を記述したことが分かる。このことから、芭蕉は等裁に対して特別な友情を抱いていたことが伺えるのである。

⁷⁸ 「福井」『奥の細道』角川文庫ページ57の注意に基づく。

⁷⁹ 成井恵子『『奥の細道』に現れた女性』から引用。

⁸⁰ 八月十五夜の名月

● 大垣にて登場した人物（越人・俳人・友人）

芭蕉は等哉とともに種の浜に赴き、宿泊した寺で道行きを等哉に記させ、敦賀に戻った。次に美濃国の大垣で、伊勢から来た曾良と再会した。『奥の細道』で芭蕉は次のように記している。

<原文>露通もこの港まで出で迎ひて、美濃の国へと伴ふ。駒に助けられて大垣の庄に入れば、曾良も伊勢より来たり合ひ、越人も馬を飛ばせて、如行が家に入り集まる。前川子・荊口父子、その外親しき人々、日夜訪ひて、蘇生の者に会ふがごとく、かつ喜びかついたはる。旅のものうさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮拝まんと、また舟に乗りて
(「種の浜」『奥の細道』角川文庫)

大垣では知り合いが昼夜を問わず訪問してきて、芭蕉の無事を祝った。こうした友人たちに旅の苦労を認められ、芭蕉は生き返ったような気分になった。

何日間か過ごし、再び伊勢の旅を続けようとしたとき、以下の句を詠んだ。

蛤のふたみに分かれ行く秋ぞ

旅の出発のときは春だったが、今は秋も行こうとしている。芭蕉は『奥の細道』を「行春や…」で始め、「行秋ぞ…」⁸¹の句で締めくくっている。最初の句では、故郷を離れ友人との別離の悲しさを詠んでいるが、「行く春」という語句の響きから、旅の前途に対する希望や、別れてもまた再会する 때가やがて来ると期待、あるいはそうなる定めという心境が伝わる。

最後の句では、芭蕉は、離れにくい蛤の蓋とその身が別れるかのように、見送る人々と別れがたい、と詠っている。友と別れ、自分は伊勢へ出立しようとしている。終わろうとしている晩秋が一層身にしみて感じられる。この句は、芭蕉の、親しい人から離れたくない胸の内を、蛤の蓋の比喻で互いの関係を表現しようとしている。それと共に、離れがたい蛤の蓋と身が別れるように見送る人々と別れたくない自身の思いも表現しようとした。我々も、二見が浦の蛤ではないが蓋と身に別れて新たな出発するのだ、と芭蕉は述べたのである。友人たちと今度もまた別れなければならぬ。別離は酷く辛いものであるが、貝の蓋が開くように、友人たちとの別離も避けることができない運命である、そうした芭蕉の感慨が伝わってくる句である。このように芭蕉は、友人との別れの心を描いている。

「イ」俳人・門人以外の人物

『奥の細道』で俳人・門人以外の人物は数多く登場するが、ここで取り上げるのは本文である程度注目され、記述された人物である。

● 日光にて登場した人物：一（仏五左衛門—宿主）

松尾芭蕉は『奥の細道』に進んで、日光に着き、日光山のふもとにある宿に泊まった。ここで芭蕉は宿の主人の名前を聞いて次のような文章を残している。

<原文>あるじのいひけるやう、「わが名を仏五左衛門といふ。よろづ正直を旨とする故

81 『奥の細道』〈旅の事実〉と旅の真理

に、人かくは申しはべるまま、一夜の草の枕もうち解けて休みたまへ」といふ。いかなる仏の濁世塵土に示現して、かかる桑門の乞食順礼ごときの人を助けたまふにやと、あるじのなすことに心をとどめて見るに、ただ無知無分別にして、正直偏固の者なり。剛毅木訥の仁に近きたぐひ、気稟の清質もつとも尊ぶべし。」（「日光」『奥の細道』角川文庫）

上記のように芭蕉は、この主人、仏五左衛門のやることを意識して観察していたが、彼はただただ世俗的な打算がなく、功利的ではなかった。正直一辺倒なだけの男であった。

その性質はもっとも尊重すべきものだったという。仏五左衛門の歓迎に芭蕉の心は惹かれ、旅の途中に親切な性格に出会えることは珍しいと思った。更に、仏五左衛門の暖かい心に触れて、芭蕉は彼が仏そのものであるように感じた。この出会いは芭蕉に対する見知らぬ人の歓迎の意志の表れであり、記憶に残ったものであった。

● 那須にて登場した人物：一（かさね一少女）

松尾芭蕉は旅を続けて那須野に着いた。そこで、自然の中に生きる人々である農夫・野夫・子供二人を焦点化し、この経験を見事に描いた。ここでは、それらの中でも特に印象的な小さな女主人公ともいえる、那須野のかさねをとりあげて、様々な観点から論じてみることにしたい。

芭蕉は馬で那須野の草原を通った時、「かさね」と出会った。「かさね」ともう一人の子供は近くに住む草刈りの男の子供と思われる。芭蕉とその男の対話や「かさね」の登場する章段は『奥の細道』で次のように描かれている。

<原文>そこに野飼ひの馬あり。草刈る男に嘆き寄れば、野夫といへどもさすがに情け知らぬにはあらず。「いかがすべきや。されどもこの野は東西縦横に分かれて、うひうひしき旅人の道路みたがへん、あやしうはべれば、この馬のとどまる所にて馬を返したまへ」と貸してはべりぬ。小さき者ふたり、馬の跡慕ひて走る。ひとりは小娘にて、名を「かさね」といふ。聞きなれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは八重撫子の名成るべし

曾良

（「那須野」『奥の細道』角川文庫）

上記の俳句は曾良による作だと本文中では書かれている。しかしながら、紀行文の本文が芭蕉の筆である以上、本文の流れに沿った句を曾良が詠むということは不自然であるように思われる。それ以上に、この句は曾良日記に書かれた曾良の句と比べると、その作風や完成度に大きなずれが見られ、曾良による作だとは考えにくい。

そもそも『奥の細道』という作品は芭蕉の作家性によるもので、曾良の作と書かれていたとしても、そこには芭蕉の視座が内在化されていると考えるのが妥当であろう。

そうしたことから、この句は曾良の作というよりも芭蕉によるものであると考えるべきである。

そして、芭蕉がこの句を曾良の作としたのは、芭蕉が「かさね」の名前に共鳴し、大いに心を引かれ、可愛い女の子のことを記憶に刻み、女の子と一緒に歩いている曾良というイメ

一ジを句にしたためであろう。そして、筆者にとってもこの句は前文をよく受けてその雰囲気や情感をよくまとめ、この章段になくはならない一行となっているように思われる。更に、上記の句はこの章段の組み立ての必要から作られた句であり、前文との連句的配合の上で詠まれているのだといえよう。

最終的に言えることは、この句は芭蕉の心のひそかな動きで、芭蕉は自分の子供がいたとしたら、この名を付けたかもしれない、そのような強い情感を読み取ることができる。親の心を想像し、確信する役割を演じている。

● 仙台にて登場した人物：一（加右衛門一画工）

仙台に到着する直前、芭蕉は飯塚で病気にかかった。回復し仙台に達した芭蕉は、画工の加右衛門と知り合った。加右衛門は商いの傍ら画を描き、内に芭蕉の心をとらえるものを持っていた。仙台の観光地を案内するなど、芭蕉をもてなした。芭蕉は『奥の細道』の中で加右衛門を次のように書いている。

＜原文＞「名取川を渡って仙台に入る。あやめ葺く日なり。旅宿を求めて、四五日逗留す。ここに画工加右衛門といふ者あり。いささか心ある者と聞いて、知る人になる。この者、「年ごろ定かならぬ名所を考へ置きはべれば」とて、一日案内す。宮城野の萩茂り合ひて、秋の気色思ひやらる。玉田・横野、躑躅が岡はあせび咲くころなり。日影も漏らぬ松の林に入りて、ここを木の下といふとぞ。昔もかく露深ければこそ、「みさぶらひみかさ」とはよみたれ。薬師堂・天神の御社など拝みて、その日は暮れぬ。なほ、松島・塩釜の所々、画に書きて贈る。かつ、紺の染緒付けたる草鞋二足餞す。さればこそ、風流のしれ者、ここに至りてその実を顕す

あやめ草足に結ばん草鞋の緒

かの画図にまかせてたどり行けば、奥の細道の山際に、十府の菅あり。今も年々十符の菅菰を調べて国守に献すといへり。

（「宮城野」『奥の細道』角川文庫）

仙台で加右衛門と知り合った芭蕉は、彼を「風流の知れ者」と褒め称えた。芭蕉は仙台では句を残さなかった。また句会を開催したというような記録も残されていない。けれども、加右衛門は、芭蕉との別れに、餞別の品として紺の染緒の草鞋を二足、贈った。ここからも加右衛門が風流の道に通じた人物であったことが解る。紺の染緒はあやめ草の花の色を意味している。当時、端午の節句の夜、軒端にあやめ草を飾って、健康を祈る風習があった。加右衛門は芭蕉に紺色の緒の草鞋を餞別として手渡し、旅の安全を祈るとともに、風雅の心も込めて贈ったのである。加えて加右衛門は、松島や塩釜の名所旧跡を画に描いて贈った。

芭蕉は加右衛門の描いた図面を用い、松島、塩釜に向けての旅を続けた。加右衛門の温かい気遣いに感謝した芭蕉は、前述の句を詠んだ。四、五日間という極めて短期間の交流ではあったものの、両者は深い結びつきを得ることが出来た。前述の句でも、加右衛門の親切に対して感謝する芭蕉の心情が表現されている。仙台で芭蕉は加右衛門と出会い、間もなく豊かな友情を築いた。

● 塩竈にて登場した人物：－（盲目法師－琵琶法師の芸人）

市川の壺の碑を見て涙を落とし、気が重くなった芭蕉は、海辺で魚を分ける声を聞いていると、「みちのくはいづくはあれど塩竈の浦漕ぐ舟の綱手かなしも⁸²」と古人が詠んだ気持ちに共感している。同じ日の夜、芭蕉は琵琶をならす盲目法師と出会った。そのことを次のように記している。

<原文>その夜、盲目法師の、琵琶を鳴らして、奥浄瑠璃といふものを語る。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子うち上げて、枕近うかしましけれど、さすがに辺国の遺風忘れざるものから、殊勝におぼえらる。 （「塩竈」『奥の細道』角川文庫）

市川から悲しみを抱えている芭蕉は、この琵琶を鳴らした奥浄瑠璃を、古い文化として伝えられている。海辺で魚を分ける声を聞いた時に詠んだ句も、その様子に当てはまる古歌である。このように芭蕉は伝統を回復し、次の時代に文化を伝えようとしている。

● 市振にて登場した人物：－（遊女一少女）

芭蕉は象潟で名所の見事な風景を記憶に刻み、旅を再開した。数多くの険しい坂道を越えて、親知らず子知らず、犬戻りなどの難所も越え、市振に辿り着いた。宿に泊まった芭蕉は既に疲れ切っており、すぐにも眠りにつこうとした。すると表側の部屋からうら若い女の声が聞こえてきた。老人の声も交じっている。女の声の主は越後国新潟の遊女たちであった。伊勢神宮参拝の途中であり、翁は市振まで同行してきたが、遊女たちと別れ帰路につくという。

翌朝、芭蕉が草鞋を履こうとしていると、遊女たちが伊勢までの道が分からなくて不安なので、同行して欲しいと頼んできた。芭蕉は同情したが、遊女たちの頼みをごまかして、宿を立去った。芭蕉はこの出来事について次の句を詠んだ。

一つ家に遊女も寝たり萩と月

芭蕉が市振に宿泊したとき、偶然、遊女たちも同宿していて、一つ屋根の下で寝ることになった。芭蕉と遊女の取り合わせは月と萩の花のようなもので、無縁のようで不思議に思える。この市振の遊女との場面は、当時の読者の間で、かなり人気があったようである。またこの場面は、『奥の細道』の中でも、一つの山場になっている。

しかし虚構説も根強く、西行の江口の遊女の場面に倣ったとも考えられている。

芭蕉には西行に敬意を表して、思想や行動に倣う姿勢がしばしば見られる。女性観も同様で、『奥の細道』での市振の遊女の描写も、江口における西行と遊女の出会いの場面を模倣したものであるという説もある。

『奥の細道』の市振の件で、芭蕉は、遊女について次のように記している。

<原文>「白浪の寄する汀に身をはふらかし、海土のこの世をあさましよう下りて、定めなき契り、日々の業因、いかにつたなし」 （「宮城野」『奥の細道』角川文庫）

芭蕉は上記の文で遊女の運命の哀れさを的確に記述している。付け加えると、人間の多く

⁸² 「末の松山・塩竈」『奥の細道』角川文庫、ページ31

は宿命というものに揺さぶられている。遊女や僧形をしている芭蕉も、外面は異なっているように見えるがその内面には大きな違いはない。萩も月も実態は変わらないと認識し、運命に左右される人間の生涯と、逆戻りの効かない時間を、遊女の姿に見出したのである。芭蕉による、「卑しい」職業で生活を営む女性の内面とあり方とを描写したものである。遊女も他の民衆と同じく善悪の識別ができ、自らの職業に人生の価値を見出して、倫理から外れる行いを避けようとする。一般社会から隔絶されていようとも、社会の一員である人物を、芭蕉は市振のくぐりで描こうとしている。

<両作の関連>

人々の繋がりが詳しく記述されている『奥の細道』とは反対に、アッギエーエの紀行文の『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』では、人々の繋がりはあまり見られなかった。

松尾芭蕉の旅は江戸から大垣までの旅で色々な場所に行き、様々な人と出会うことを中心にしている。本書にある詞書や俳句を通して、松尾芭蕉は人と人の新しいつながりを作り、疎遠になっていた関係を回復した。

旅の先々で密接な人間関係を成功している。それは、芭蕉の人々に対して暖かい視線を持っていたためであり、そこには、根源的な人間に対する信愛と結び付きを求める心があったのである。

そうした感情は、アッギエーエには見られないものであり、芭蕉が人間関係をより重視していた俳人であることが明らかになる。

『奥の細道』に登場する人物、すなわち日光の仏五左衛門、那須の草刈る男とかさね、須賀川の等躰、仙台の画工加右衛門、尾花沢の鈴木清風、新潟の遊女たち、金沢の一笑、福井の等裁、そして大垣で再会した友人たち等々。これらの人たちは芭蕉にとって、一期一会に相当する人物であるといえる。彼らは、旅路で出会った人々であった。

芭蕉は、そうした人々との出会いから得られた洞察や体験した出来事、つまり、那須野のかさねの可憐さ、仙台の加右衛門の芸術、仏五左衛門の正直な心、市振の遊女たちの無邪気さなどから、インスピレーションを得、そしてそれを作品として結晶化させ、俳句を芸術的な域に高めることに成功し、俳聖とまで言われるようになったのである。

第七節、旅への想い

アッギエーエはインドの東側のアッサムを梅雨の時期に、北西のパンジャブ州を夏に、北西の奥にあるカイバル（現在、パキスタンに位置する場所）を冬に訪れた。これらの地域はその時期が最も厳しく、旅に出かける時期としてはあまり適さないものである。けれども、彼の心は熱烈に旅の魅力を求めているのでためらうことはない。すなわち、アッギエーエならではの旅であった。

この心構えをアッギエーエは、紀行文の『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』の冒頭で詩と文を使って表現し、自分が旅に出る想いを語っている。

〈ヒンディー語〉

चल चल देता है लाद लादकर बार बार बंजारा

सब ठाठ धरा रह जाता; धन बस दूर क्षितिज का तारा

यायावर को भटकते चालीस बरस हो चलें, किन्तु इस बीच न तो वह 'अपने पैरों तले घास (या माँस !)' जमने दे सका है, न कुछ ठाठ जमा सका है, न क्षितिज को कुछ निकट ला सका है— उसके तारे को छूने की तो बात ही क्या ! कितने स्थल उसने देखे जहाँ बैठ कर ऋषियों ने देहों पर वल्मीक उगा लिये, जहाँ मुनि तपस्या करते करते पाषाण हो गये, जहाँ देवता जम कर पर्वत-श्रृंग बन गये, जहाँ मानवों ने एहिक कंक्षाओं-वासनाओं से मुक्ति पायी—किन्तु यायावर ने समझा है कि देवता भी जहाँ मन्दिर में रुके कि शिला हो गये, और प्राण-संचार के लिये पहली शर्त है गति, गति, गति ! छुटपन में चीनी कहावतों के एक संग्रह में जिस वाक्य ने उसे सब से अधिक प्रभावित किया था और जिसे उसने अपना गुरु मन्त्र मानकर डायरी के मुख-पृष्ठ पर लिख लिया था, वह था/

‘मैं क्यों चाहूँ कि मेरी अस्थियाँ भी मेरे पुरखों कि अस्थियों के साथ एक सुरक्षित समाधि-स्तूप में दबी रहें? जहाँ भी कोई चला जाय, वहीं कोई हरी-भरी पहाड़ी मिल जाएगी ...’

“अरे यायावर रहेगा याद”, पेज 4

〈訳〉

旅心がそそられて漂泊の思いが止まず

快適さよりも、旅の苦勞を選ぶ

「旅人は40年間歩き回り、その間、止まることもなく、快適な生活を選ばなかった。空を飛んで星を触ることのようであった。聖人たちは苦行の結果身体を蟻塚に変えたり、瞑想して石のようにもなった。更には、凍りついて山の一部分にもなった。そのようにして、人間は動きことをやめて、欲望から開放され、寺では動かない神が偶像になっている。しかし、旅人のみは、生きていることの秘訣は動くことであるとした。子供の時、中国のことわざ集の中にある表現に強く影響を受けたので、大事な言葉として自分の日記の表紙に記述したのである。それは次のようである。

なぜ、私は先祖と同じ埋葬塚に自分の遺灰を埋められなければならないのでしょうか？

もし、他の所に行けば、美しい野原と木に覆われた山を見つけるでしょう。

『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』、ページ4

アッギエーエの心は未知の旅に魅力を感じ、不慮の死に見舞われることになったとしても、旅に出ようという気持ちを表している。

更に、紀行文の『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』の最後の部である第七部はアッギエーエを旅に誘う強い好奇心を語っている。アッギエーエには旅への興味が子供時代からあった。アッギエーエは旅に出ていない時には、地図を見ながら雪原、砂漠、森、海、島といった異郷に自分がある想像をしていた。そして、旅に出ようと決心したら、それをかならず完遂した。

ある時、アホム族の都ソナリからトラックでシワサガルに行くことを決心した。道路には

水が流れ込んでいたが、無視して先に進んだ。やがて道路は完全に浸水してしまった。どこに道路があるか分からなくなってしまい、トラックをUターンすることも出来なかった。最終的に3マイルぐらいトラックをバックのまままで走らせて戻った。それでも、行くのを諦めず、川の辺りにあった船にトラックを載せ、川を渡ろうとした。けれども、川を渡った後、川岸でトラックは滑り、半分ほど水に沈んだが、なんとかして引き上げた。

〈ヒンディー語〉

「वास्तव में जितनी यात्राएं स्थूल पैरों से करता हूँ, उस से ज्यादा कल्पना के चरणों से करता हूँ/
..... एक जीवन-दर्शन का निचोड़ है/ रमता राम इसलिए कहते हैं कि जो रमता नहीं
वह राम नहीं/ टिकना तो मौत है “अरे यायावर रहेगा याद” पेज 228

〈訳〉

「実際に全ての旅は身体の足だけでなく、それ以上想像の足でしたのであった。これは、人生の哲学であって、動くのは人生で、一ヶ所に留まり動かないことは死に等しい。」

『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』、ページ 228

アッギエーエは上記の文で紀行文の『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』の旅を締め括っている。

他方、『奥の細道』の旅に出た松尾芭蕉も、三千里の奥羽へ長い行脚はいかにも不安の募るものであったし、生きて帰ることのできる保証もなかった。しかし、そのような旅であっても芭蕉は白川の関を越え、松島の月の美しさに臨むことへの漂泊の思いが止まず、芭蕉ならでの旅が始まったのである。その心構えを松尾芭蕉は『奥の細道』の冒頭に次のような文章を執筆し、旅そのものについての漂泊を望む感情を示している。

〈原文〉月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして、旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。予も、いづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の巣を払ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の関越えんと、そぞろ神の物につきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて取るもの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかかりて、住めるかたは人に譲り、杉風が別荘に移るに、

草の戸も住み替わる代ぞひなの家

(「発端」『奥の細道』、角川文庫)

最初の旅である『野ざらし紀行』から『笈の小文』、そして代表作である『奥の細道』と、芭蕉は常に「旅に生きる俳人」であった。こうした芭蕉の思想は、『奥の細道』導入部の「月日は百代の過客にして、行きかふ年も旅人なり」という件からも理解できよう。

芭蕉は上記の文を示すことで、旅に対しての想いを明確にしている。例えば、時の流れとは、日は月になり、月はまた年になって永遠に続く旅に出かけているようなものである。同じように人生も一つの旅であると主張し、古人である西行、藤原実方に倣って芭蕉もまた風雅の道を歩いた。

本書の発端では芭蕉が、住み慣れた芭蕉庵を他人に譲り、客死も覚悟して出立する。そして、旅の終わりに次の句が記載されている。

蛤のふたみに別れ行く秋ぞ

紀行文の発端の句と締め括る文として上記の句は、本質的に同じである。つまり、『奥の細道』の旅が終わっても芭蕉の旅はそのまま続くということである。

離れがたい気持ちを示している上記の句は、蛤のふたが別れるように、芭蕉も見送くる人々と別れ、旅を続けて伊勢の方に進んだのである。

<両作の関連>

芭蕉は『奥の細道』の旅に出る際、旅の発端にこのように示した。月日というものは年代を通過して永遠の旅を続ける旅人のようであり、芭蕉も同じように日々の生活を営む旅人のようである。そして、古い年が去り、新しい年が来るように住んでいる所も新人に新しい人に住み替えられる。そして、柱に残した発句は、芭蕉の安住した生活を捨てて旅に出立する心を表現している。

他方、アッギューエも旅に出ること、あるいは動くことを「生きる」と称し、命をかけても旅を続けたいという気持ちを表している。アッギューエはこの想いを三つの点で解説している。

第一に、凡人は自分が住んでいるところや家族たちとの愛情に囲まれた暮らしから離れることが出来ないし、そうした生き方の成れの果ては先祖と同じ埋葬塚に自分の遺灰を埋められることを欲するというものである。アッギューエはそれと対比して、自らの屍を埋めるのであれば美しい野原や木に覆われた山の方がふさわしいと主張した。

第二には、ヒンドゥー教の神は動くのを止めて石になったが、アッギューエは生きることの秘訣は動き続けることであると見出し、自分が生きるためには動き続けたいと考える。

第三は、インド社会において偉大なる存在である聖人たちは苦行の結果、身体を蟻塚に変えたり、石のようにもなったりして欲望から開放されたが、アッギューエはそうではなく、旅に出ることで快適な生活という欲望から開放されるのであるとして、旅の心構えを示している。

第六章、松尾芭蕉とアッギューエ

第一節、俳句理解によるアッギューエの韻文の変遷

インドにおいて古代から伝わる文学は、他の国と同じように韻文形式がその代表であった。しかし、ひと言で韻文といっても、その規模は他国のそれと比べて極めて大きく、数千、数万行を越える韻文作品もある。その例は、韻文形式で書かれた宗教詩であるヴェーダなどである。古代から近代に至って書かれた長々詩の作品としては、まず古代の4つのヴェーダ、叙事詩の『ラーマヤナ』と『マハーバーラタ』などが挙げられ、さらに中期には古典サンスクリット語による「カーヴィヤ」という作品も成立した。そして、近世には5千韻からも成っている『クマーン・ラーソー』が登場し、近代になっても12行から30行で構成される『ギタンジャリ』がインドの韻文代表作として認められていた。

上記のような韻文の盛んな文学環境の中で、詩人アッギューエは誕生した。彼の詩はそうした文学史の中で構築されてきた規則、語彙、文章量などを踏襲したものであり、従来の韻文の歴史を背負ったものであった。

その一方で、4、5歳頃に詩人としてのアッギューエの将来を決定づける、ある重要な出来事が起こった。そのことについて、アッギューエの自叙伝『アトメネパード、आत्मनेपद、接尾語』の「私の最初の詩」の段落で、次のように述べている。

〈ヒンディー語〉

में तब चार साल का था - मुझे एक फिरकी मिली/ उसका नाम मैं नहीं जनता था, उन्होंने बताया - भूमिरी, मैंने उसे बरामदे में ले गया और चुटकी से जैसे उन्होंने बताया था उसे घुमाने लगा तब मैंने ताली दे-देकर चिल्लाना शुरू किया - "नाचत है भूमिरी" छंद की गति के कारण अनायास ही भूमिरी को भूमिरी बन जाना पड़ा/ सहसा चौंक कर मैंने जाना कि जो बात मैं कह रहा हूँ, उसे वास्तव में अधिक कुछ कह रहा हूँ - नाचत भुमि री - मेरी भूमिरी नाचती है, सो तो ठीक है लेकिन अरी, भुमि भी तो नाचती है - नाचत है, भुमि, री ! पर उस समय मैंने जाना कि मेरी भँवरी ही नहीं, भुमि भी नाचती है - सारा विश्व-ब्रह्माण्ड नाच रहा है- मैंने एक साधारण वाक्यों से एक असाधारण अर्थ निकल लिया है - मैं अविष्कारक हूँ, सृष्टा हूँ ! मैंने शब्द कि शक्ति को पहचान लिया हूँ/

आत्मनेपद, 1960, पेज20

〈訳〉

四歳のことであり、(中略)その時、ある「こま」をもらったが、こまの名前を知らなかったのので、尋ねたところ、「ブミリ」と教わった。私はこまを廊下へ持って行き、回し始めた。(中略)その時、拍手しながら「ナチャット・へ・ブミ・リ (ブミリが回っている。)」と叫び始めた。同じ文章を何回も繰り返すことで、「ブミリ (コマ)」は「ブミ・リ (地球)」となっていた。私はそれを聞いてびっくりし、自分が話している言葉は、ただの言葉ではない。「ナチャット・へ・ブミリ」は、「こまが回っているという意味だけでなく、「地球が回っている」という意味も含まれている。(中略)その時、私は「こまが回る」ということだけではなく、この地球も回っていることを悟った。そして、本当は全宇宙が回っていること

に気付いた。私はただ一つの言葉で、とても重要なことを表現してしまったのだ。私は発明者であり、創造者であった。私は言葉の力を既に会得していた。

『アトメネパード』、1960年、20ページ

歌ったり、踊ったり、言葉を繰り返したりしていたアッギューエは知らないうちにある言葉から生み出される不思議さ、面白さに惹かれていった。これはアッギューエをいかにも驚かせ、言葉に隠されていた多義性を発見させることになった。少年時代に起こったこの出来事は後々のアッギューエの文学観に影響を与えたといえよう。

上記の経験について、アッギューエは次のように述べている。

〈ヒンディー語〉

पाठक हँस सकता है। आज मैं भी हँस सकता हूँ। लेकिन इस बोध से उस दिन जो रोमांच हो आया था, उस की छाप आज भी मुझ पर है-और उस दिन से मैं कभी नहीं भूला हूँ कि शब्द शक्ति का रूप है, कि शब्द का सार्थक प्रयोग सिद्धि है। इस लिए, मेरी पहली कविता कौन-सी थी, इस प्रश्न के उत्तर में यह बाल्यकालीन अनुभव प्रासंगिक तो है ही, भले ही वह वाक्य कविता न रहा हो इसीलिए मैंने जिज्ञासा की थी कि कविता का ही कविता से सम्बन्ध है !

अनुप्रास और लय-इन की पहचान अपेक्षया सहल भी होती है, सहज भी: अबोध शिशु लोरियाँ सुन कर ही इन तत्त्वों को पहचानने लगता है। और इन के बोध में अभिभूत करनेवाला वह तत्त्व नहीं होता जो शब्द की अर्थ-बोधन क्षमता को पहचानने से होता है-वह एक दूसरी ही कोटि का बौद्धिक आनन्द है..

आत्मनेपद, 1960, पेज 21

〈訳〉

読者は笑うかもしれない。今、私も笑える。けれども、その日の面白さの感覚は現在まで残っている。そして、その日から言葉は一つの力であることを忘れなかった。そして、有意義的な使用で言葉は成就する。だから、私の最初の詩はどれだろうという質問に対して、少年時代の経験は詩ではなくてただの文章だといっても当てはまる。そういうことで、詩には詩の関係があると私は興味を持っていた。

頭韻と韻律の認識は比較的簡単で単純である。無邪気な赤ん坊は子守唄を聞くだけでこれらの要素を認識することを始める。けれども、この感覚には魅惑的な要因はなく、言葉の潜在的な意味を知覚する能力である。これは別の種類の知的な快楽である。

『アトメネパード』、1960年、21ページ

少年時代に言葉の力を実感したアッギューエは詩人になってから「スズメの詩」を完成させようとしていたが、中々完成させることができずに放置していた。その状況の中アッギューエは1957年の夏に来日した。日本の文化人とも交流し、美しい自然を歩いて、日本の社会をより身近に体験することができた。アッギューエの日本での滞在中、日本文学の実際も体験した。その文学体験の中で注目すべきことは、「五・七・五」の音節を組み合わせる、世界で最も短い詩の一つである俳句の実感である。

アッギューエは日本語が分からなかったが、日本人の友人の解説を通して俳句の本質を

よく理解したのであった。更に、アッギューエは俳句をヒンディー語で翻訳をすることにも挑戦した。そして、その翻訳したものを持ち帰って帰国したのである。

日本に滞在中に出会った俳句に、アッギューエにどのように影響されたか、ということに彼自身が執筆した文章から読み取っていききたい。

〈ヒンディー語〉

सन 57 की गर्मियों में जापान जाने का सुयोग हुआ/ जापानी साहित्य थोडा बहुत पहले भी पढ़ा था और यूरोपीय काव्य और चित्रकला पर जापानी काव्य और चित्रकला के प्रभाव की बात भी मेरी अनजानी नहीं थी/ लेकिन तबसे लगातार कुछ महीनों तक बहुत-सा जापानी साहित्य पढ़ता रहा/ विशेषतया जाड़ों में जापान के सुन्दर प्राकृतिक स्थलों में अकेले घूमते या रहते हुए जापानी काव्य में गहरे उतरने का प्रयाप्त अवसर मिला/..... मेरी कापी की वह अधूरी कविता अब भी मेरे साथ थी/ मैं जब तब जापानी लघु मुक्तक 'हाइकू' के संग्रह उठाकर पढ़ता और कुछ एक मुक्तक पढ़ने के बाद आप्यायित भाव से पुस्तक एक ओर रखकर बैठ सोचता रहता कभी कभी अपनी कापी उठाकर उसके पन्ने उलटता और गौरैया चिड़िया वाली कविता पर रुक जाता अनन्तर जापान से लौट आया/ कई जापानी कविताओं का अनुवाद किया था; उन्हें क्रम-बद्ध करके रख दिया और दुसरे देशों के साहित्यों कि ओर प्रवृत्त हुआ/

फिर एक दिन अचानक अपनी कापी उठायी और गौरैया चिड़िया वाली पंक्तियों को मूल रूप में एक नये पृष्ठ पर लिखा; ऊपर शीर्षक दे दिया 'चिड़िया की कहानी' फिर एक बार शीर्षक-युक्त पंक्तियों को देखा और सहसा पहचान लिया की यह कविता है - की इतनी ही कविता है और मैं जो कुछ उसमें जोड़ने का मोह कर रहा था वह अधिक से अधिक व्याख्या हो सकता था- नहीं तो वह भी नहीं, निरा कूड़ा ही रह जाता/

मेरे मन के भीतर जो चिड़िया वर्षों से उड़ती-उड़ती भी नहीं उड़ नहीं पायी थी और पती को वर्षों से कांपता ही छोड़ गयी थी, उस दिन सहसा उड़ गयी/ काँपती हुई पती थिर हो गयी/

(आत्मनेपद पेज 51 से 52)

〈訳〉

1957年の夏に訪日した。日本の文学にはずっと以前から出会っていたし、私はヨーロッパの詩や絵画の中にも、日本の影響を受けたものがあることを知っていた。来日してからずっと、日本の文学を読み耽ったり、冬の景勝地を一人で歩いてみたり、そこに滞在してみたりして、日本の詩情を深く理解することができた。.....(中略).....私の未完成の詩はその時も持参していた。私は日本の俳句集を読み始めた。いくつかの俳句を読むと、まだ完成していないこの詩のことが思い出され、俳句集を横に置いて、またひたすら考え始めていた。しかし、どんなに考えても、これ以上は何を加えれば良いのか分からなかった。.....(中略).....ようやく私は日本から帰国した。いくつかの日本の詩を翻訳し、順番に並べておいてから、しばらく他の国の文学に傾倒していた。

ある日、ふと未完成の詩が書かれたノートを取り出し、「スズメの詩」を新しいページに書き付け、「スズメの話」と題を付けた。そして、題名が付けられた詩に目を通すと、私はすぐにそれが完成された詩であると確信した。これ以上書き加える必要はなかったし、書き

加えたとしても、それは詩の解釈でしかない。

「スズメの詩」は長年にわたり、私の心から飛ぼうとして飛べず、「葉」もずっと震え続けていたが、その日、「スズメ」はいきなり飛んだ。そして、震えていた「葉」もようやく静かになった。
『アトメネパード』、52-53ページ

アッギューエは俳句の思想や形式に触れて、初めて「スズメの詩」が詩として完成していることに気付いた。極めて短い「スズメの詩」は、アッギューエにとって長らく「未完成」であったが、世界最短の俳句と結び付けて考えることで、詩の「完成」を悟ったのである。

更に、俳句との出会いによって長年の疑問を氷解させ、詩を新しい境地にまで引き上げたことで、より深く俳句へと近付いて行った。

その「スズメの詩」は、1959年に出版された詩集『アリ・オ・カルナ・パルバーメー、अरी ओ करुणा प्रभामय, ああ、輝く同情』に次のように掲載されている。

〈ヒンディー語〉 उड़ गई चिड़िया काँपी , फिर थिर हो गयी पती⁸³

〈読み〉 ウル・ガイ・チリヤ カーンピ・フィル ティル ホ・ガーイ・パッティ

〈逐語訳〉 スズメは飛び、振動した、又止んだ 葉っぱ

〈意訳〉 雀飛び 揺れる枝葉の また止まる

上記の詩の背景をアッギューエは自分の言葉で次のように述べている。

〈ヒンディー語〉

जो घटना देखी, उसमें इतनी देर नहीं लगी थी/ एक चिड़िया आकर क्वार की पती के छोर पर टिकी ही थी कि - शायद मेरी ही तरह चिक के दुसरे पार की हलचल का आभास पाकर- पती को ठेलती हुई फिर उड़ गई/ मानो उसका बैठने आना, पती को छूना, और पकड़ने से भी पहले ठेलकर उड़ जाना, अलग-अलग क्रियाओं का क्रम नहीं, एक अविभाज्य क्रिया थी/ पंजों के और पंखों के धक्के से आहत लम्बी पती दो एक बार कांपी और क्रमशः स्थिर होती चली गयी
आत्मनेपद 196

〈訳〉

私が見たものは、瞬間のことだった。一羽のスズメが木の葉に座ったとたん向こうの動きを認知し、葉から跳ね飛んだ。スズメの座りに来ること、葉に触れること、握る前に跳ね飛んだことは、まるで、別々の行動ではなくて、不可分の動作であった。爪と翼で押された長い葉は、一、二回振動して徐々に止んだ。

『アトメネパード』1960年

「スズメの話」という詩の背景を説明した上記の文章は、アッギューエの極めて繊細な感

⁸³ अज्ञेय "अरी ओ करुणा प्रभामय" भारतीय ज्ञानपीठ, नयी दिल्ली, 2006, पेज 78

を踏んでいると思われる。一番目は、上記に語ったように、少年時代に起きた言語的な認知や言葉の不思議さの発見であり、それは彼を子供の頃から言葉の力を認識させるものであった。

二番目は、「スズメの話」を執筆し終わった時の経験である。詩として完成していないように思われるが、しかし更に書き足そうとしても、それは解説にしかならず、結局は書き加えることが出来なかったという無力感を抱いたのであった。

三番目は、来日して俳句と出合ったことである。限られた文字数で瞬間の響きを言葉で表現し、あえて語らないことで豊かな表現を可能とする世界を知った。それを実感して帰国したアッギューエは未完成の詩である「スズメの話」がすでに完成しているということをようやく認識した。

更に、俳句との出会いで得られた影響はその後のアッギューエの詩にしばしば見られた。限られた文字数で表現できることや全てを語らないことによって伝えられる表現は来日するまでのアッギューエにとって未開地のままであった。

第二節、アッギューエの俳句理解

アッギューエの俳句理解について、インドのネール大学教授の日本文学研究者であるワルマ氏は、第三十三回日文研フォーラムで発表した講演「インドに於ける俳句」で、次のように語っている。

東京外国語大学のヒンディー語文学の田中敏雄教授は「アッギューエは俳句の外国語の翻訳に一番成功した翻訳者である。」と言っています。アッギューエは日本語がわかりません。しかし日本人の友達の助けを借りて翻訳された詩の深いところまで理解しようとしてきました。ときには、勝手な翻訳も加えますが、美しい詩に翻訳することに成功しました。⁸⁶

更に、ワルマ教授は1977年に出版した『ジャパニ・カヴィターエ、ジャパニ 詩集、日本の韻文集』でアッギューエが翻訳した芭蕉の俳句である<夏草や 兵どもが 夢のあと>に対して、次のように述べている。

(ヒンディー語)

अज्ञेय का हिंदी अनुवाद संभवतः मूल कविता की आत्मा को अधिक स्पष्टता के साथ अभिव्यक्त कर रहा है-

यह सावन की दूबः हरे सपने ये खेत रहे वीरों के

अज्ञेय के अनुवाद में 'ग्रीष्म की घास' 'सावन की दूब' में बदल गयी है जो भारतीय सन्दर्भ में

⁸⁶ 『インドに於ける俳句』、サトヤ・ピ・ワルマ、第33回日文研フォーラム、ページ24～25

सार्थक भी है और मूल भाव की अभिव्यंजना में अधिक समर्थ भी/ साथ ही, 'खेत रहना' मुहावरे का प्रयोग से हिंदी अनुवाद में जो व्यंजना उभरी है, वह योरोपीय अनुवादों में नहीं है/

'जापानी कविता' पेज xxxvi से xxxvii

(訳)

アッギエーエは原文の本質を明確に表現しようとする。

(ヒンディー語) ヤ・サーワヌ・キ・ドーブ ハレ・サプネ・ヘ ケート・ラヘ・ヴィ
ロ・ケ

アッギエーエの翻訳では「夏草」を「サーワン・キ・ドーブ (訳: 夏のある時期に決まって生える草)」に変えている。その方がインドでは伝わりやすいし、詩情を的確に表現することができる。更に、インド語のことわざである「ケート・ラヘ (訳: 戦争で亡くなった)」を使い、虚しさを表現したものは、英語の訳にはあまり見られない。

(『ジャパニ・カヴィターエ』 ページ 36~37)

ワルマ教授は俳句をインドに導入することに当たり次のポイントを中心に翻訳したと思われる。

「切れ字」のニュアンスを自分が訳した俳句に入れたワルマ教授は、ヒンディー語でそれを表すために前置詞などを使った。更に、詩には感嘆符の符号や感嘆符の名詞や助詞も使って翻訳を日本語と同じような意味合いに近づけた。

このようなワルマ教授の翻訳とは違って、アッギエーエは詩としての表現を重視した。それは、ヒンディー語としての新しい詩のように読みうるものであったため、読者は詩の下に書かれていた参考文献を見ない限り、実験主義アッギエーエの新しいジャンルのように受容した。

アッギエーエが俳句を翻訳してインドで出版した文献について言及すると、1959年に日本から帰国した後、出版された『アリ・オ・カルナ・パルバーメー』という詩集が一冊あるのみである。瞥見の限りでは、他の文献は存在しないため、アッギエーエの俳句理解を明らかにするために本書は重要な一冊となる。これによると、アッギエーエは芭蕉の句に最も惹かれていたことは明らかである。『アリ・オ・カルナ・パルバーメー』で訳された28句のうち、芭蕉の句は最も多い8句が集成されたためである。

アッギエーエが訳した俳句を次のようなポイントで解説することが出来る。

- 一、詩の内容に相応しい言葉を逐語訳せず、インド社会に当てはまる言葉を選んだこと。
- 二、詩の韻律を遵守したこと。
- 三、三行の俳句を四行でも訳したこと。
- 四、行同士を密接に関連付けていること。
- 五、インド人の読者に俳句のニュアンスを伝えるために三行の順番を並べ替えたこと。

上記の項目を詳細に語ると次のようになる。

一、アッギューエは詩の内容を逐語訳せず、インドのコンテキストで当てはまる言葉を選んだ。このポイントはワルマ教授も1977年に出版した『ジャパニ・カヴィターエ』の36項で俳句の例をあげながら説明したことである。その例は筆者も本節で上記に引用している。少年時代から言葉の力を理解していたアッギューエは自分が訳した詩に最適な言葉を選んで、読者に外国語の詩を訳したものだと思わせることなく、新しいジャンルの詩を創出したかのように読ませることに成功した。

そうしたアッギューエの言葉遣いの例を彼自身が訳した芭蕉の有名な句で確認したい。その句は次のようである。

〈俳句〉	古池や	蛙飛び込む	水の音
〈ヒンディー語〉	ताल पुराना	कूदा दादरः	गुडुप
〈読み〉	タル・プラナ	クダーダードル	グルップ

インドでもよく流行したこの句は、アッギューエの詩人としての感性で訳したものである。上記の句の最後の単語「水の音」はヒンディー語で「गुडुप、グルップ」となっている。この単語は「水の音」の逐語訳ではなく、水から出る音の擬音語である。もし、ヒンディー語で「水の音」をそのままの言葉で表現したら、読者の想像力を言葉の強さで響かせることは出来ないだろう。けれども、擬態語の言葉が使われたからこそインド人の読者に詩的なクライマックスを感じさせることが出来たのである。

二、インドの韻文界ではリズムは大事な役割を果たす。古代からヴェーダなどが歌の形式で読まれ、聞き手や読み手に心地よく聞こえるようにするために韻律的に書かれた。その従来形式が現在に至っても詠み続けられている。歌が中心のインド社会では韻文にもいくつかのジャンルがあるが、どの詩にあってもリズムは欠かせないものである。そうした文化圏のなかで生きたアッギューエは俳句を訳した時、俳句の終わりをリズムを感じさせる言葉遣いで仕上げている。

三、アッギューエは俳句を翻訳することに当たり、大抵の場合、三行で訳すことを基本としているが、場合によっては二行や四行になっていることもある。

ここで嵐雪の句とアッギューエがヒンディー語で四行で訳したものを紹介すると同時に1932年に出版された宮森氏の“An Anthology of Haiku Ancient and Modern”⁸⁷で270ページで載せられている本句の三行となっている英語訳も引用したい。

〈俳句〉	来る水の	行く水洗う	涼み哉
〈ヒンディー語〉	तोते पानी के सोते में	नहाने का सुखः	
	जाते पानी को धोता है	आता पानी	
〈読み〉	トテ・パーニ・ケ・ソテ・メ	ナハネ・カ・スーク	

⁸⁷ 宮森氏を引用する理由は第二章に述べたようにアッギューエはこの本の英語訳を読んだ可能性があるからである

ジャーテ・パーニ・コ・ドータ・ヘ アータ・パーニ

〈英語〉 I enjoy the cool The coming water washes the departed water

アッギューエは俳句の英訳を読むと同時に、日本人の友人から俳句の解説などを聞いて俳句を深く理解したようである。上記のヒンディー語訳を分析すると、アッギューエは友人の解説に頼ったように見える。日本語の知識がないアッギューエにとって本句の感覚をそのまま受け入れて、またヒンディー語で表現するのに三行は不足であった。これは、原語の知識がない時や大量の解説が逆に混乱を引き起こす場合には、表現が難しくなるためであると思われる。

四、アッギューエは訳した俳句の行同士を密接に関連付けた。一般的な翻訳ではそれぞれの単語を逐語訳するばかりで、行と行の間の関連を表現しきることはできない。結果として、そうした翻訳では、原語の詩の持つ情景を再現することは出来ない。しかし、アッギューエは彼自身の詩的な感性で行と行の関連を意識することで、豊かなビジョンを表現することに成功している。

その結果、俳句はインド人に広く受け入れられることとなり、この功績について、アッギューエは『アリ・オ・カルナ・バルバーメー』の序文でも取り上げている。

五、アッギューエは俳句の三行をそのままの語順で訳さず、行の順番を変えてインド人の読者に近く感じられるニュアンスで伝えようとした例もある。この点については、アッギューエが訳した芭蕉の句の例を取り上げたい。

その句の訳は次の通りである。

〈俳句〉 やがて死ぬ 景色は見えず 蟬の声

アッギューエが訳したヒンディー語は下記のようなものである。

〈ヒンディー語〉 झिल्ली का अविरत उल्लास देता है संकेत कहीं क्या उसे मृत्यु है कितनी पास

〈読み〉 ジッリ・カ・アヴィラット・ウッラス デター・ヘ・サンケート・カヒ・キャ・
ウセ ミリティユ・ヘ・キトニ・パース

上記の句の訳は三行となっているが、原語の一番目の行はヒンディー語で三番目になり、俳句の三番目の行は訳されたヒンディー語では一番になっている。

アッギューエは順番を変えることで、詩をインド風に伝えようとしている。ヒンディー語訳で最初の行になっている「蟬の声」は、詩の始まりとして読者に話題の導入を提示するものである。更に、ヒンディー語の訳で二行目になっている「景色は見えず」で詩の背景を作り、訳で最後の行になっている「やがて死ぬ」で詩のクライマックスを描写している。

つまりアッギューエが行を変える主な理由は、詩の本質をそのままインド人の読者に伝えるためであり、原語の行通りにヒンディー語で訳していたとしたら、読者に詩的な感覚を伝えることは難しかっただろう。

第三節、芭蕉とアッギエーエの差異

元禄二年（1689）、江戸を発って東北の長い旅に出た松尾芭蕉は歌枕を辿りながら呻吟を重ねて、蕉風を確立したといわれる。『奥の細道』の旅は、単なる物見遊山の旅ではなく、芭蕉にとって自分の文学の新たな展開を企図した旅であった。その旅を記した『奥の細道』を書くことで、芭蕉は自らの生きる姿勢と理想的な俳諧の世界を作品を通じて描出しようとしたと思われる。一方、アッギエーエの『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』で描かれたのは、インドの東北地方を仕事上で回る旅であり、文学に関わる名所旧跡や詩などを詠むことを目的としたわけではなく、自らの見聞を単純に描き連ねるためのものであった。

けれども、両者が執筆した紀行文は旅の記録でありながら、同時に、紀行文を通じて自分の心を表現し、見つめ直そうとしたものであることに違いはなかった。二人の詩人にとって、旅とは芸術を完成させるための修業のようなものであり、またその作品は言葉の豊かな可能性と多義性が表現されたものとなっていた。

本節ではその共通点と相違点を、いくつかの観点を挙げて、論じていきたい。

松尾芭蕉の『奥の細道』は俳諧を中心とした作品であり、旅の途中での見聞が磨き抜かれた文章で綴られた優れた紀行文として知られている。様々な面から取り上げられ論じられているこの作品であるが、私は、この書の中で描かれる人間関係こそが、この作品を特徴付ける最大の要因であると考えている。本書にある詞書や俳句を通して、松尾芭蕉は人と人の新しいつながりを作り、古い縁故を回復するという、人間関係のありようをさまざまに描いているのである。

先に記したように、『奥の細道』は歌枕を巡ることを中心とした紀行文であるといわれている。それらの歌枕の地で、芭蕉はどのような俳句を詠んだのかを振り返ってみよう。

『奥の細道』で歌枕としてよく知られている「白河の関」、「武隈の松」、「平泉」などの例を挙げながら分析して行きたい。

<白河の関>

『奥の細道』において「白河の関」は、平安期から多くの古人に歌われてきた代表的な歌枕であって、他の章で扱われる歌枕よりも遥かに重要な位置を示しており、芭蕉は旅立ちの発端から白河の関を越える夢を見たことと記している。けれども、芭蕉はこの白河の関に到着すると、その光景を「いかで都へと便り求めしもことわりなり。中にもこの関は三関の一にして、風騒の人、心をとどむ。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲添ひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し衣装を改し事など、清輔の筆にもとどめ置れしとぞ。」と書く。すなわち実際の光景を実写するのではな

く、古人、つまり「たよりあらば いかで都へ 告げやらむ 今日白河の 関は越えぬと」と詠んだ平兼盛、「都をば 霞とともに 立ちしかど 秋風ぞ吹く 白川の関」と詠んだ能因法師、そして「都には まだ青葉にて 見しかども 紅葉散り敷く 白河の関」と詠んだ源頼政をまず、思い出していた。実際に芭蕉が白河に着いたのは四月二十日（陰暦六月七日）の青葉の季節であるにも関わらず、芭蕉の脳裏に浮かぶのは名歌を詠んだ慕わしい古人たちの描いた紅葉の季節なのである。そしてその後でようやく「卯の花の白妙に、茨の花の咲添ひて、雪にも越ゆる心地ぞする」と実景が入るものの、この章は「古人冠を正し衣装を改し事など、清輔の筆にもとどめ置れしとぞ」と『袋草紙』に見える清輔朝臣を思い浮かべて終わっている。「白河の関」は歌枕で有名な土地でありながらも芭蕉は俳句を残さず、曾良の句を載せて章を閉じている。つまり、「白河」という歌枕にようやく着いたのに、その地では名所としての光景ではなく、そこで歌を詠んだ古人の俳句を中心に描いているのである。

<武隈の松>

この章では、芭蕉はまず「武隈の松にこそ、目覚る心地はすれ。」と、松によって心を動かされたことをまず表現している。それは能因法師が詠んだ「武隈の松はこのたび跡もなし千年を経てや我は来つらむ」という古歌を思い浮かべるからである。能因法師が詠んだ歌を再確認することで、芭蕉は「代々、あるは伐、あるひは植継ぎなどせしと聞に、今将、千歳のかたちとゝのほひて、めでたき松のけしきになん侍し。」と心を強く揺さぶられたのであり、能因が称賛した松に対して芭蕉も敬意を示したのである。芭蕉は単なる歌枕である名所の美しさを愛でたのではなく、能因法師を称讃しているのである。

<平泉>

「平泉」は、芭蕉は奥州藤原氏の栄華が滅びたことを悲嘆的に語る章である。「三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金鶏山のみ形を残す。先高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめぐるて、高館の下にて大河に落入。泰衡等が旧跡は、衣が関を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。偕も義臣すぐって此城にこもり、功名一時の叢となる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠打敷て、時のうつるまで涙を落し侍りぬ。」と、芭蕉は藤原三代の栄華の夢と義経の悲劇の歴史を回顧し、詠嘆をうたいあげている。芭蕉は平泉の光景を鑑賞するのではなく、そこに失われた英雄達の姿を思い描いているといえよう。今はほとんど何もなくなってしまっている土地の様子ではなく、古代の英雄達の哀しい最期を眼前に見るように思い浮かべ、本章では「時が移るまで涙をおとしはりぬ」と記述して激しい悲嘆で涙を濡らし、古人に対する自分の心境を表現したのである。芭蕉にとって、平泉に行くことは、

単なる歌枕を訪れたというよりも、奥州藤原一族の悲劇の地を訪れることの方が重要な目的で、過去の人物への崇敬の念が際立っているのである。

芭蕉はこのように、行く先々でその土地に因む人々を思い出し、新しい人間関係を結んでいく。そして、実は旅をする者も、芭蕉一人ではなく、曾良という忠実な門人と一緒であった。芭蕉にとっての『奥の細道』の旅は、人と人の絆に溢れた旅であったと私は考える。

一方、アッギューエの『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』では、人との交流が描かれることは少ない。アッギューエも旅に於いて、現地の人々と交流したり、古人に対する崇敬の言葉などを示したりする局面はもちろんあった。しかし旅で出会った人々はごく少ない人数であり、彼らとの交流は有意義なものであっても、それ以上の深い親愛の情を示したりすることは書かれていない。たとえば第六行程で、アッギューエはアッサム州の三つの村の村長やゴサーイと交流し、ゴサーイが持っていた三百人程の生徒に世界の現状について講義しており、アッギューエの文化人としての役割を強く印象づけるが、アッギューエの心情がそれ以上に動くことはなかった。

しかし、作中では古人に対する崇敬の念はしばしば描かれている。例えばムガル帝国の第6代皇帝であるアウラングゼーブ（1618年～1707年）がクルダバード（意味は天国の郷）を移住したことや、アウラングゼーブが王族でありながら自身も労作して生活を営み、死後は質素な墓で眠っていると語っている部分などからは、アッギューエのアウラングゼーブへの敬意が読み取れる。

また、ラトナ・ドーワジュ王（1146年～1244年）の王子の遺体が渡された美しい場所を、サヴォディア（遺体が渡された）またはサディアと呼ぶようになったことを記した部分からは、呼び名の由来を歴史的な経緯から述べて古人の家族愛を読み取っており、そこに古人に対しての崇敬の態度を読み取ることはできるだろう。

更に、アッギューエが古人の詩人のミーヤ・ナジール（1735年～1830年）の時代の詩や民衆が詩に対する親しみの感情を持っていたことに非常に感動したことや、女王詩人であるザエブン・ニシャ（1638年～1702年）の没落した城を見て心を痛めたこと、15世紀の盲目詩人であるスルダースが住んでいたヤムナー川のほとりの記念の庵を参拝したことなども、アッギューエが詩学の先達に対する親近感を抱いていたことが読み取れる表現であると思う。しかし、アッギューエは古人への強い感情というよりは、歴史をいとおしむ気持ちを強く持っていたのだと思われる。古人とその時代、古人の周りに居た古代の大衆、それらを平等にいとおしむ視線が感じられるのである。

このようにアッギューエの当時の人々の交流、古人に対しての敬意の言葉、詩人に対して

の記述は、彼が文学にしか興味の持てない芸術一辺倒の人物ではなかったことを示している。

これは、芭蕉の人間関係に対する視座と近いようにも思われる。しかし、芭蕉は古歌を読んだ古人への強い尊崇の念を、古歌への憧憬ゆえに持っているのに対し、アッギエーエは過ぎ去った歴史の中の出来事に関わる人物への尊敬を表しているのみであり、芭蕉とアッギエーエの差異は大きい。

そして両者の作品の性格には、それ以上に根本的な違いがある。

芭蕉の『奥の細道』とアッギエーエの『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』は、書かれた目的がはっきりと異なっているのである。芭蕉は『奥の細道』を理想的な旅、芸術の為の旅とは何かを示すための「作品」として、長い年月を掛けて文章の推敲を重ねて作り上げた。その為には全体的な構成を丁寧に考え、フィクション（虚構）的な描写も盛り込み、「理想の旅」を作り上げたのである。一方、アッギエーエは旅の記録、すなわちノンフィクションの無機質なものとして旅の記録を企図したのである。

『奥の細道』の中で最もこのフィクションとしての性格が明確に現れているのは、「市振」の遊女の話であろう。芭蕉と曾良は越路の旅を続ける内に、そのような体験をしなかったという完全な保証はない。しかし曾良の「随行日記」にこの記録が一切ないことから、ここでの描写は芭蕉は西行が江口で遊女と会ったというエピソードを元に、フィクションとしての旅行く遊女との出会いという場面を作り、「市振」の構成を作り上げたと考えるのが妥当だろう。たとえば「連句文芸」を考えると、恋の場面というモチーフは必要不可欠であり、この章の存在が『奥の細道』に与える影響は大きい。また、遊女というモチーフを用いることで、遊女としての人生の寂しさ悲しさを社会に伝えようともしている。紀行文にこの一章を導入することで、旅のあわれも描写することができたのである。

続いて、那須野の章では「かさねとは八重撫子の名成るべし」という句が曾良の名で入っている。この俳句の前の記述では、芭蕉は少女の「かさね」という名前に注目し、その響きが優しく聞こえると強調している。けれども、その趣旨を継いだ句は、唐突に曾良の名で掲載され、これが芭蕉と曾良の二人の旅であることを示しているのである。芭蕉自身が作った句であっても、理想的な旅として必要であると考えれば、俳句の作者はこのように変えられていくのであった。

旅で芭蕉を同行している曾良の立場を推し上げることによって、師弟の旅を綴った素朴な記録というよりも、二人の優秀な歌人による句集という体裁を取ることが可能となる。そうした操作はこの作品の文学的な格というべきものを明確に打ち立てることに繋がるので

ある。

他方、アッギューエの紀行文を見ると、『奥の細道』のような現象はあまり見られない。旅の途中訪れた村や町などで見聞きした様子をそのまま伝えている。歴史的な人物である諸王や詩人などについても、彼らの生前の記録やエピソードを読者に歴史的事実として伝えようとしたのである。

更に、旅で出会った人々のことや目で見た伝統や文化なども事実をそのまま、紀行文に記述した。心理的な描写も、書き手としてのアッギューエの内面を正確に叙述することを目指したものである。言い換えると、アッギューエは旅の中で目にした単純な物事から重要な伝統や歴史のことをそのまま描き、虚構的な操作は『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』では見られない。

結論としては、両者の作品は、芭蕉の紀行文が虚構的な操作が行われ、芸術作品としての格式を追求した、読者の視点を意識している作品であるのに対して、アッギューエの紀行文ではフィクションの要素が見られず、アッギューエ自身の旅の正確な記録を目指しているということが、両作品の大きな相違点として認められる。

一方で、芭蕉とアッギューエの一番大きな共通点は芸術家としての特質にある。そのことは両者の紀行文から読み取ることが出来る。

アッギューエは『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』の冒頭で、「旅心がそそられて漂泊の思いが止まず、快適さよりも、旅の苦勞を選ぶ」という詩を詠んで日常生活の快適さは旅の楽しみには代え難いという思いを吐露した。それに対して、芭蕉は『奥の細道』導入部の「月日は百代の過客にして、行きかふ年も旅人なり」という文を残した。

更に、アッギューエは「旅は身体の手だけでなく、想像の手で行い、動くのは人生で、一ヶ所に留まり動かないことは死に等しい」という文章で紀行文の『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』の旅を締め括っている。それと同様に、芭蕉も『奥の細道』の旅の終わりに「蛤のふたみに別れ行く秋ぞ」という文を記述し、東北の旅が終わっても芭蕉の旅はそのまま続いていくという意思を示した。

前述の通り、『奥の細道』という作品は、芭蕉の人間に対する興味、人と人との繋がりがもたらす感動を描くという特徴があった。芭蕉の関心は人間そのものにあったということが読み取れるのだが、しかしその現実の人間関係は決して単純な豊かさを持つものではなかった。むしろ芭蕉はそうした人間関係を忌避していた節もある。

『奥の細道』で描かれる芭蕉の人間に対する関心は、交流のあった俳人や門人、歴史上の古人、旅先で出会った奇人などに向けたものであるが、そうした関心は新たな詩作へ

と繋がるものであった。芭蕉の旅先での人間への関心は、実は人間への興味ではなく、その先の芸術的な創作と直結したものなのである。

実は、芭蕉が旅に出るということは、江戸で育まれた人間関係を放棄するということでもあった。江戸での人間関係とは、富裕層の町人を相手に、勝れた宗匠としての芭蕉の育んできた師弟関係であり、弟子からの礼金に支えられた豊かな物質的生活を意味していた。芭蕉が、そうした生活を続けることから、芸術の停滞と墮落に至ると判断したであろう可能性は高い。

すなわち芭蕉の旅情というものは、自らの芸術活動と密接に関わっていたのである。旅に出るということは、新たな人間関係から得られる詩のモチーフを獲得するということでもあり、芸術の完成を阻む人間関係を棄却することでもあった。人間を描くことを自身の芸術の本質としていた芭蕉が、実際の人間関係をつとめて放棄しようとしていたという矛盾は、彼が重視するものが芸術の洗練と完成であったという芸術至上主義によるものであるといえるだろう。

そうした芭蕉の芸術に対するストイシズムがもたらした人間関係は、結果的にアッギエーエのそれと類似したものとなっている。

『アレ・ヤヤワル・ラヘガ・ヤード』を執筆した当時のアッギエーエは、戦争の影響や家庭内の事情により、荒廃した人間関係の中にあっただ。それでもなお、アッギエーエは旅に出て、紀行文をしたためたのである。これは旅と文学を通じて、自身の心を確認し、形に残そうという試みであったといえる。

この二人の旅人は、あえて自らを過酷な環境に追いやることで、自らの芸術の完成を目指したストイックな芸術至上主義者という、芸術に対する態度という点で共通している。また、その結果として生み出された芸術そのものもまた、言語の多義性によって豊かな芸術空間を表現しうるのだという、言語の可能性を追求したものであるという点でも共通している。

そうした芭蕉とアッギエーエの共通性の到達点が、『エク・ボンド・サフサ・ウチリ』で描かれた雪山での静寂の中で生まれた心情が、芭蕉の「やがて死ぬ、けしきは見えず、蟬の声」という句に重なっていくその情景なのである。芸術の完成を目指した二人の作家は、心の澄みきった、自然の生命の中へと融けこんでゆく感覚において通じていくのである。

終わりに

今回の博士論文を執筆する動機は、芭蕉とアッギエーエ、両者にはどのような結び付きがあるだろうか、という疑問であった。結論としては、日本の俳人である松尾芭蕉や詩人であるアッギエーエは別々の時代、別々の国の環境に生きていても類似点がある、ということである。

更に、俳句の影響でアッギエーエの詩が新しい境地にまで引き上げられたことも注目すべきである。

振り返ってみれば、日本文学史の知識が浅い私にとって、日印文学の比較は、荒海にあえて船を出す、危険な航海のようなものであった。けれどもインドの大学から始まったこの旅を、修士論文の提出を通して博士論文に辿り着いても終わらせようとは思わない。芭蕉とアッギエーエは一生を旅にして、生きていることの秘訣は動くことであると伝えたように、私も研究という航路を次なる段階に進めたい。本格的な研究者になるべく研鑽を積んでいく所存である。

最後に、この論文を作成するにあたりご指導くださった板坂則子教授、ウニタ先生、他の諸先生方、白鳥先輩、井黒先輩、板坂ゼミナールの皆様に深く感謝申し上げます。両親、そして大阪大学の博士モハammad・モインの助言と激励を一生忘れることはないだろう。

2013年9月30日

モハammad・イムラン

参考文献一覧

☆ s テキスト

- ・『ऋग्वेद संहिता』 (リグ・ヴェーダ)、ヴーエディーカ・サムソダーダナー・マンダル出版、インド、1995年
- ・『ऋग्वेद संहिता』 (リグ・ヴェーダ)、スヴァデヤーヘ・マンダル出版、インド、1997年
- ・『जानकीहरणे』 (ジャーナकीハラナ)、クマラダーサ、オリエンタル出版社、ボンベ、インド 1908年
- ・Tagore, “Firefly” Published by Home-made books, New York 2012
- ・Tagore, “Stray Birds” Published by McMillan and Co. Ltd, Toronto, 1916
- ・अज्ञेय “अरे यायावर रहेगा याद” नेशनल पब्लिकेशन हॉउस, नयी दिल्ली, 1997
- ・अज्ञेय “एक बूंद सहसा उछली” भारतीय ज्ञानपीठ, नयी दिल्ली, 2008
- ・सत्य भूषण वर्मा “जापानी कवितार्ये” सीमान्त पब्लिकेशन, 1977
- ・अज्ञेय “अरी ओ करुणा प्रभामय” भारतीय ज्ञानपीठ, नयी दिल्ली, 2006
- ・अज्ञेय “ आत्मनेपद” भारतीय ज्ञानपीठ, कशी, 1960
- ・顯原退蔵・尾形侑訳注、『新版 奥の細道』、角川ソフィア文庫、2003年
- ・『新編日本古典文学全集 71 松尾芭蕉集②』、小学館、1997年
- ・赤羽学編・訳注、『笈の小文・更科紀行芭蕉紀行集Ⅱ』、明玄書房刊、1969年
- ・加藤秀俊、『人間関係の理解と誤解』、東京：中央公論社、1966.6
- ・フランシス・ボオ著、『人間関係』、山崎清訳、東京：白水社、1970.1
- ・市古貞次、『日本文学史概説』、秀英出版、1959年
- ・尾形侑、『奥の細道』、角川ソフィア文庫、2007年
- ・西尾実・猪野謙二・秋山虔、『日本文学史』、秀英出版、1962年

☆ 研究書

- ・アル・シヤマサストリ、『देवनागरी लिपि का उदभव』 (デーヴァナーगरी文字の起源)、パーラーティ・パルカション、インド、1973年
- ・田中於菟弥、『世界の文学史 9 インドの文学』、明治書院、1967年
- ・ルイ・ルヌー、渡辺重朗、我妻和夫共訳、『インドの文学』白永社、1996年
- ・博士ラーダ・バツラブ・トリパーティ、『संस्कृत साहित्य का अभिनव इतिहास』 (サンスクリット語文学のアビナヴァ歴史)、ヴィスヴ・ヴィग्ダラヤ・パルカション、インド、2001年
- ・博士ジャヤキシャヌ・プラサード・カンデールワール、『संस्कृत साहित्य का सुबोध इतिहास』 (サンスクリット語文学のスボド歴史)、メーダ・パルカション、インド、2001年
- ・博士ヴァチャンデーヴァ・クマール、『संस्कृत साहित्य का इतिहास』 (サンスクリット語文学の歴史)、ネシヤナル・パブリッシング・ハウス、インド、1977年
- ・教授ディ・ディ・シャルマ、『संस्कृत भाषा का इतिहास』 (サンスクリット語の歴史)、チャ

- ウカムバ・ヴィディヤ・バヴァース、インド、2000年
- ・博士バラート・シング・ウパーデヤへ、『पाली साहित्य का इतिहास』(パーリ語文学の歴史)、ヒンディー文学協会出版、パルヤゴ、インド1949年
 - ・ラーム・シング・トマール、『प्राकृत और अपभ्रंश साहित्य तथा उनका हिन्दी साहित्य पर प्रभाव』(プラークリット語文学とアパブランシャ語文学、両者のヒンディー語文学に影響)、ヒンディー語・パリサード・パルカーション、インド、1964年
 - ・博士ラクシミシャガル、『हिन्दी साहित्य का इतिहास』(ヒンディー語文学の歴史)、ロークバールティ・パルカション、インド、1981年
 - ・博士ラクシミシャガル、『हिन्दी साहित्य का मानक इतिहास』(ヒンディー語文学の標準的な歴史)、ロークバールティ・パルカション、インド、1973年
 - ・博士ラメース・チャンドラ・シャルマ、『हिन्दी साहित्य का इतिहास』(ヒンディー語文学の歴史)、ヴィダー・パルカション、インド、2008年
 - ・博士ナゲンドーラ、『हिन्दी साहित्य का इतिहास』(ヒンディー語文学の歴史)、ネシャナル・パルカション、インド、1980年
 - ・Vit Bubnik, A Historical Syntax of Late Middle Indo-Aryan (Apabhram̐sa)、JB出版社、インド、1984年
 - ・संपादक डॉ. कन्हैया लाल नंदन “अज्ञेय-रचना संचयन” भारतीय जनपीठ, 2010
 - ・K・クリपラーニ・著/森本達雄、『タゴールの生涯』、第三文明社、インド、1989年十月
 - ・Edited by Uma Das Gupta “Rabindranath Tagore – my life in my words” Penguin Books India, 2006
 - ・我妻和男、『タゴール・詩・思想・生涯』、ベクトル印刷株式会社、2005年
 - ・रमेश चन्द्र शाह “अज्ञेय” साहित्य अकादमी, 1990
 - ・इला डालमिया कोइराला, नीलिमा माथुर“ कवि नायक अज्ञेय—साक्षात्कार” प्रभात प्रकाशन, दिल्ली, 2002
 - ・डॉ. केदार शर्मा “अज्ञेय-साहित्य; प्रयोग और मुल्यांकन” अनुपम प्रकाशन, जयपुर, 1963
 - ・Harold G. Henderson “An introduction to haiku- From Basho to shiki” Anchor book Edition USA, 1958
 - ・R. H. Blyth “Haiku” Kamakura Bunko Tokyo 1949
 - ・A. Miyamori “An Anthology of Haiku Ancient and Modern” The chugai Printing Co. Ltd, 1932
 - ・Kenneth Yasuda “A pepper Pod” Alfred A. Knopf, Inc, Newyork 1947
 - ・Kenneth Yasuda “The Japanese Haiku” Charles. E. tuttle Co. Inc Rutland, Vermont 1957
 - ・復本一郎、『芭蕉の弟子たち』、雄山閣出版、1982年
 - ・麻生磯次、『奥の細道講読』、明治書院社、1970年

- ・市川通雄、『松尾芭蕉研究』、笠間書院社、1989年
- ・三木健司/三木慰子、『野ざらし紀行』—英訳とその研究、教育出版センター、1996年
- ・久富哲雄、『芭蕉・曾良・等窮—資料と考察』、笠間書院、2004年
- ・小澤克己、『奥の細道』〈旅の事実〉と旅の真理〉、東洋出版、2007年
- ・井本農一、『日本文学の研究』、角川書店、1978年
- ・山崎誠、『日本文学研究資料叢書』、有精堂出版、1972年
- ・阿部喜三男・久富哲雄、詳考『奥の細道』増訂版、(株)日英社1979年
- ・雲英末雄・金子俊之、『日本文学研究大成』—芭蕉、国書刊行会、2005年

◇ 雑誌論文

- ・プラット・アブラハム・ジョージ (P. A. George)、『インドに於ける日本研究の現状、問題と将来性』、『立命館言語文化研究』21巻3号2009年)
- ・白田雅之、『叙述における歴史と文学の関係』〈インド文学史〉、(『南アジア言語文化』東京外国語大学、第4号、2006年3月)
- ・田中敏雄、『Agyeyaの詩、Asadhya v i n aをめぐって』『インド学仏教学研究』、日本インド学仏教学舎、第十九巻第二号、昭和46年3月
- ・森本達雄、『ギタンジャリ』『タゴール著作集第一巻詩集I』第三文明者、1981年5月30日
- ・藤原定訳、『迷える小鳥』『タゴール著作集第一巻詩集I』第三文明者、1981年5月30日
- ・森本達雄、『日本紀行』『タゴール著作集第十巻自伝・回想・旅行記』第三文明者、1987年3月30日
- ・大岡信訳、『蛍』『タゴール著作集第二巻詩集II』第三文明者、1984年3月30日
- ・大畑健治、『奥の細道』の全体構成、『国文学』第22号B、1993年3月
- ・西村真砂子、『嵯峨日記考(二)』『国文学』、1982年1月
- ・野谷良子、『笈の小文』についての考察(『国文学』第26集、1989年2月)
- ・宮川康雄、『更科紀行』の旅程(『国文学』第22号B、1993年3月)
- ・岡村健三、〈人間観〉肉親・友人、『国文学』、1964年7月券8号
- ・阿倍喜三男、〈人間観〉庇護者・師・弟子、『国文学』、1964年7月券8号
- ・成井恵子、『奥の細道』に現れた女性、『国文学』第22号B、1993年3月)
- ・飯野哲二、『奥の細道』に於ける自然と人間、『国文学』、1982年1月)
- ・白石悌三、女性—文芸の恋と生活の恋、『国文学』第22号B、1993年3月
- ・富山奏、那須野に於ける「小姫かさね」の構成、『四天王寺女子大学紀要』1980年3月)
- ・瀬川虎年子、『奥の細道』小考—芭蕉と加右衛門(1)、清泉、1963年4月

- ・瀬川虎年子、『奥の細道』小考—芭蕉と加右衛門 (2)、清泉、1963年5月
- ・瀬川虎年子、『奥の細道』小考—芭蕉と加右衛門 (3)、清泉、1963年6月
- ・瀬川虎年子、『奥の細道』道地蹟私考—実方と道祖神 (1)、清泉、1962年11月
- ・瀬川虎年子、『奥の細道』道地蹟私考—実方と道祖神 (2)、清泉、1962年12月
- ・瀬川虎年子、『奥の細道』道地蹟私考—実方と道祖神 (3)、清泉、1963年1月
- ・平井照敏、『おくのほそ道』を読む (1) 俳諧師芭蕉、書齋の窓、1983年2月
- ・平井照敏、『おくのほそ道』を読む (2) 道の記と俳文、書齋の窓、1983年3月
- ・平井照敏、『おくのほそ道』を読む (3) 素材配合の工夫、書齋の窓、1983年4月
- ・平井照敏、『おくのほそ道』を読む (4) 那須野のかさね、書齋の窓、1983年5月
- ・平井照敏、『おくのほそ道』を読む (5) 「植て立去る柳」、書齋の窓、1983年7月
- ・平井照敏、『おくのほそ道』を読む (6) 「笠島はいづこ」、書齋の窓、1983年8月
- ・平井照敏、『おくのほそ道』を読む (7) 松島と象潟、書齋の窓、1983年9月
- ・平井照敏、『おくのほそ道』を読む (8) 平泉のくんだり、書齋の窓、1983年10月
- ・平井照敏、『おくのほそ道』を読む (9) 光堂のくんだり、書齋の窓、1983年11月

◇ 書セミナー

- ・Two days conference on 'Rabindranath Tagore, Noguchi Yonejiro, Sacchidanand Agyey & Ishikawa Takoboku' Organized by Indo-Japan Association for Literature & Culture, New Delhi, March 3-4, 2012

◇ 講演書

- ・『The Spirit of Japan』、タゴール、慶應義塾大学で、日印協会東京出版、1916年7月2日